

鐵棒を振ひて聽衆をして拳を握り腕を扼せしむるを想ふ。然も「江戸咄」の著者が金平淨瑠璃の聽衆を指して惟力亂神を好む鳥游の者と云ひしは元祿七年なり。岡清兵衛は貞享三年に歿したりといへば金平淨瑠璃の盛時は寛文貞享の間なるべきに早くも一面に斯る誹を受く。徳川幕府の基礎既に固く天下益昇平にして江戸は承應明曆以降勇武なる父祖漸次世を謝し華奢苟安の子孫風流を競ひ丹前勝山の優姿一世を靡かし遊里劇場益盛なる元祿の春を迎へては世の嗜好亦從ひて移り復三十年前舉つて健剛なる薩摩淨雲に謳歌せし日と同じからず。斯る變遷に處して丹波椽和泉太夫か剛快一點の趣味は豈ながく人心を繋ぐに足らむや。果してさしも盛なりし金平淨瑠璃も元祿寶永に入りて漸く衰へ享保に及びて全く迹を江戸に收め置に殘影を邊土に止むるに終り之に反して外記土佐式部語齋肥前等の諸派は半太夫河東に匯會して江戸淨瑠璃の一派を爲せり。蓋し後者は能く世勢とともに推移したればなり。

以上淨雲東下以來諸流並起に至る關左淨瑠璃の概況を述べぬ。但淨雲系統の外別に若山五郎兵衛結城天滿以下の諸説經淨瑠璃あれど小唄長唄の來歴とともに

一括して十寸見河東が淨瑠璃大成の條下に説く可ければ此に及ばず。まづ眼を轉じて虎屋源太夫の西上につきし關西斯樂の發達を説かむ。嘗て淨雲の東下するや從つて東せしもの多く江戸の淨瑠璃漸く興るやまた東より西上する者相踵ぐ。抑も京師は淨瑠璃樂發源の地なれば假令偉人淨雲の如き大に力を茲に用ひざりし爲に傳統の正興隆の勢江戸の如くならざるも尙其行はれしや言を待たず。然るに幾ならずして承應元年には薩門四天王の杉山丹後椽西上して四條河原に樂場を設け五年を経て明曆三年には虎屋源太夫の門人喜太夫も上京し受領して上總椽正信と號し之と前後して同門伊勢島宮内も上京して伊勢島節を始めて左内と顔顔し相摸太夫越後太夫等も京に上れり。左内は前にいへる六字南無右衛門左門よしたか等と並舉されし河内左内なり或はいふ左内も江戸の人と。要するに今や純西派新來の東派と相對して京都の淨瑠璃漸く盛ならんとす。然れどもその大に振ひしは寛文年間宮内上總等の師虎屋源太

へ。宮内の上京は何年なるや明記なきも萬治元年の「東海道名所記」に「近きころ江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合はる」とあり。萬治元年則明曆四年なれば宮内の上京もた承應明曆の間に在る可し。

夫が江戸を同門の士に委ねて飄然西上せしに始まると『竹豊故事』のいふが如けむ。蓋し源太夫の功はよく淨雲の衣鉢を繼承せしにあらざして、寧ろ其門下に數多の名家を出し西派淨瑠璃界拓殖の基を開きしに在り。既に宮内上總の徒師に先ちて上京せしが、更に山本角太夫(土佐)井上市郎兵衛(播磨)等亦皆其門に出てたりき。抑も大阪は京を距る置に一日程なれば淨瑠璃操は夙にこゝにも行はれたる可く、寛文の始竹田出雲は機振芝居を興行し、また太夫には伊藤寛文二年のことといふ藤出羽椽等若干あり、京の佐内宮内等も大阪に下りしことこの出雲は出雲清定の父にして、則竹田近江なり。あれども、なほ未盛ならず。恰も源太夫西上して京の淨瑠璃を一振せしが如く、大阪の斯樂界に動す可からざる基礎を立てしは井上播磨なり。播磨名は市郎兵衛業は大内の御簾つくりなりしが、生來音聲逞しく謠を學びて緩急弛張自在なりしかば、遇西上せる源太夫の門に入り、心を古流節譜の粹に注ぎ、江戸萬歳の長を採り、取捨工夫して自ら新一派を開きぬ。その東派の薰陶をうけて、遒勁の氣韻に富み、景事をよくせしのみならず、諸流の造詣深きは到底同門の土佐上總宮内等の及ぶところにあらず。然るに京都は師弟同門多きに反し、大阪は尙人なかりしかば

市郎兵衛は此に功名の地を相して大阪に下り操座を設け、大和椽要榮と受領し、尋て播磨椽と改む。實に寛文年間の事に屬す。

淨雲以來段淨瑠璃はすべて六段なりしと前に云ひしが如くなりしに、井上播磨より五段つづきと爲りきとぞ。後の義太夫節が十二段にあらざるよりは五段ものたるは此典型に據れりとやいはむ。西澤九左衛門版の『淨瑠璃年代記』には播磨の淨瑠璃節事數百段あるよし載せたりと聞けど、詳ならず。播磨及門人の樂章として知られしは左の如し。

- | | | | |
|------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|
| 『新十一段』 | 『二王の本地』 | 『日本廻り』 <small>中古見物左衛門の改作</small> | 『船遺恨』 <small>聖澤太郎敵討</small> |
| 『女袖鑑』 <small>日向景清の原本</small> | 『都女商人』 <small>放下僧のやつし能</small> | 『三親孝行』 <small>美濃國太郎助</small> | 『白旗の由來』 |
| 『敵討の遺恨』 | 『祇園精舎』 | 『大友眞鳥』 | 『荏柄平太』 |
| 『神道蟻通』 | 『百合若麻呂』 | 『甲賀三郎』 | 『源平戀の遺恨』 |
| 『道釋禪師傳』 | 『長谷寺利生記』 | 『土蜘蛛退治』 | 『金剛兵衛左文字刀』 |
| 『兵庫の築島』 | 『二代の敵討』 | 『田村將軍初觀音』 | 『理屈物語』 |

- 『二休和尚』 『根元會我物語』 『聖德太子傳記』 『業平一代記』
- 『頼朝七騎落』 『蒲御曹司東踏歌』 『大會我富士の牧狩』 『賢女手習鑑』
- 『日向景清』 『信濃源氏木曾軍記』 『大職冠智畧玉取』 『大念佛由來』
- 『三浦北條軍法競』 『楠千早合戦』 『河津角力の遺恨』 『東大寺大佛縁起』
- 『佐々木藤戸先陣』 『三浦大助老後畧』 『源氏東の門出』 『松浦五郎旅日記』

此等の外播磨が特に得意の節事たるものには、『日本王代記』の『五天竺』、『頼光跡目論』中の鹽釜の段馬の段是最高、『源氏筑紫合戦』中の宮島八景の段、『源氏熱田合戦』の長生殿四季の段、『頼義北國落』の掛物の段尤よし、『花山院物語』中晴明神ふるしの段、『菅原親王行狀』の歌仙、『金剛山合戦』の屏風八景、『道寸軍法競』の七夕祭等なり。また『金平法問評』を目中に列したるも、こは明に櫻井丹波の樂章なり。但し前掲のもの、中門人の語りし者も多かめれと、此外『源氏十五段』と『五大力菩薩』とは特に門入市郎太夫(石屋三右衛門)の『待宵物語』及び『上東門院』の二曲は同門清水理兵衛の語り物として擧げらる。されど此等の樂章は二三を除くの外、文學者の

手になりしならねば文辭概ね拙劣にして趣味枯燥をさは此七騎落「外題年鑑」に貞享三年寅正月初興行とあれど井上播磨は前年巳に世を辭したれば、此前既に井上の芝居にかゝりし感。り。たゞ一ひ播磨の之を語るに及びては、明々たる音吐満場に亘りて戸外に達し、曲節和階の妙、甲乙錯綜の工、聴者をして感に耐えざらしむ。『古今の妙音なれども語り出たしかならず、のちほど面白きは並なき娘子の新枕ともいひつべし』と『倒冠雜誌』に評せし實に左もある可く、その巧に情景の變化に應ぜし曲節の餘風は播磨地の名を竹豊二座の樂部に傳へしとかや。蓋し樂目の中『十二段』、『日向景清』、『大友真鳥』、『頼光跡目論』以下の諸曲が或は後の新樂章の材となり或は題と爲りしとともに樂風も遺りけむ。惜むらくば此妙手技を私して人に教へ世に傳ふるに吝に、門下僅にかの市郎太夫理兵衛等あるに過ぎず。これさへ師の至妙の技を傳ふるに足らざりしかば、播磨は殆んど名目上の傳統ありて事實上に後なかりしに近し。

播磨が大阪に去りし後、名を京都に得しはかへりて大阪より上りし同門山本角太夫(土佐)和歌山の人にて伊勢島宮内の門に出てし宇治嘉太夫(加賀)なり。角太夫

は始伊藤出羽椽に學びしが、入京して先づ宮内に就き、源太夫の來るや贊を其門に執りしが、延寶五年の冬十二月、嘉太夫と日を同うして受領し、土佐椽房正、加賀椽好澄と號せり。源太夫師弟東派の樂を以て西せしかば、淨雲一派の樂風、京阪を掩ひて、角太夫土佐に至る。即傳統の上に於て、角太夫は最近く江戸派を繼承する關西出身者にして、彼播磨の如く、殊特の研鑽を経て、太く師風を變じたりとも聞えねば、その風最東派を帯びけむ。其曲目には左の三十六章あり。

- 『角田川』 『小野篁』 『天親菩薩』 『愛護若』
- 『阿漕平次』 『傳教大師記』 『王昭君』 『清水清玄』
- 『源氏蓬萊三つ物』 『三條小鍛冶』 『女人往生記』 『久米仙人』
- 『都志王丸』 『飛禪内匠』 『天王寺彼岸中日』 『善光寺開帳』
- 『信田小太郎』 『信田づま』 『熊井夫郎孝行の巻』 『西教寺七万日向』
- 『三世二河白道』 『小教盛』 『鉢かつき』 『小粟判官』
- 『逆髮王子横車』 『因幡堂開帳』 『眉間尺物語』 『石童丸』
- 『浦島太郎』 『入鹿大臣』 『四十八願記』 『平親王將門』

『花山法皇順禮記』 『袈裟御前物語』 『酒頼童子』 『日蓮上人德行記』
 徒に曲目を掲ぐる頗贅冗の嫌あるも、之を覽て彼此對照せば、其題材によりて、如何に古淨瑠璃の存亡し、新作の來歴あるかを指摘するを得ん。例之ば、『小教盛』、『鉢かつき』の如きは、かの梵天國等と同じく、伽草子より出でし古曲なり。『三世二河白道』、『酒頼童子』のごときは、東派土佐節六段物の樂章なり。『隅田川』といひ、『小野篁』といひ、『愛護若』、『阿漕平次』、『清水清玄』以下幾多の材は、みな後の義太夫の樂章に用ひらるゝところならずや。たゞし土佐椽の樂風は、之を東派の内匠土佐椽のそれと區別するため、や土佐節と稱せずして、角太夫節といへり。

斯くて角太夫の土佐椽は、専ら南京操を用ひて、寛文延寶の間に聞えしが、其門下よりは、文彌節の祖、岡本文彌治太夫節とて、はやされたる山本治太夫、一中節の祖、都一中等の諸名家を出し、二中の門よりは、更に宮古路豊後椽を出して、また車派後期の宗と爲れり。地東西に亘りて、傳統關の左右に分れしも、源太夫の後をうけし角太夫より三傳して

ス。南京操のことば、錦文流の『梁大門屋敷』に見ゆ。からくり細工人は、村山五郎兵衛、其子山本彌三五郎是を傳へて、無双の名人と爲る、一筋の糸を以て、大山を動かせ、小刀一本を以て形あるものを作りて、これを働かしむ、別て水學の術を得、

また東にかへる。其間樂調の轉化こそある可けれ、山本土佐は系統上に重んず可きものと謂はん歟。將關西に於ける前東派の殿後にして、後東派の遠宗とやいはむ。

水中に入て水中より出るに衣服をぬらさず、僅なる挾笥に船を仕込川水に浮て用を遣す云々

之に反して伊勢島宮内の前東派をうけて大に變化せしは宇治加賀掾なり。加賀もと謠曲に勘能なると、井上播磨と同じく、諸種の樂器善くせざる莫し。東派の樂風西漸し播磨之を以て名を樂界に成すを見て奮勵し、まづ宮内の門に遊び、自ら工夫を凝らし、後播磨が曲譜と謠曲の音節とを長短取捨して新樂風加賀節を創む。また嘉太夫郎ともいふ。乃密に竹屋庄兵衛と計り宮内の名代を以て大看板を掲げ操芝居を設けて新作の曲『大磯虎遁世記』を語るに樂風また淨雲源太夫一派傳來のそれに似ず。濃婉華美、節くばり細かによはくたよくと語りしといへば、能く關西社會意慾の好尚に感化され、京洛人心の通性を看取し、西派獨特の體形を成せし歟。従つて『操年代記』にいへるが如く、京の見物頭から氣に入りて思の外評判よく爲に加賀も「段々新作の淨瑠璃を出し、人形衣裳まで綺麗に拵へ」延寶より寶永に及び三、四十年間京阪に名を馳せたるなり。其樂章は初興行の『虎遁世記』の外實

に百餘曲の多きに上れり。今繁を厭はず之を列舉せんか。

- 『小晒物語』 『百人一首萬年寶』 『西王母』 『一心五戒魂』
- 『身代問答』 『融大臣』 『今川了俊』 『柿本人麻呂』
- 『大佛供養』 『西行物語』 延寶五年 『染殿の后』 『吉備大臣』
- 『淨藏貴所入坂塔』 『倭藤太』 『和田軍』 『中將姫』
- 『かぢは崎』 『弓削道鏡』 『當流小栗判官』 『元服會我』
- 『融通大念佛』 『阿部宗任東大全』 『日本武尊』 『小袖會我』
- 『衣通姫和光玉』 『三井寺狂女』 『十六夜物語』 『夜討會我』
- 『晴明道滿行力爭』 『摩耶山開帳』 『法隆寺開帳』 『小野道風額捕』
- 『弘徽殿嫉妬打』 『源頼家鞠始』 『神武帝閏正月』 『薩摩守忠度』 『名千代集』
- 『惟高惟仁位爭』 『三社託宣由來』 延寶六 『須磨寺青葉笛』 『富貴會我』
- 『門出入島』 『浦島太郎七世縁』 『遊行忠人名號記』 『曆』 寶享二年作
- 『蒲冠者鞠初』 『賢女相生松』 『扇法師』 東六 『徒然草』
- 『伊呂波物語』 『天神御本地』 『鳥羽戀塚物語』 『世繼會我』

『伏見常盤』	『葵の上』	『藍染川』	『凱陣八島』
『東山殿子日遊』	『本領會我』	『關東小六東六法』	『辯慶京土産』
『平安城都遷』	『頼朝由井濱出』	『おなつ歌念佛』 <small>清十郎</small>	『吳羽中將廿三夜待』
『曾我七、伊呂波』	『桑原女之助』	『津戸三郎往來要集』	『遊君三世相』
『源三位頼政』	『葛葉道心物語』	『主馬判官盛久』	『團扇曾我』
『義経懐中硯』	『壽永忠則』	『刈萱道心物語』	『結城七郎小袖賣』
『大江山』	『傾城返魂香』	『東山殿追善能』	『和州三部經』
『靜法樂舞』	『猫魔達物語』	『新豊饒御祭』	『曾我美男草』
『忠信二十日正月』	『飛驒内匠』	『梅花垣』	『巴太鼓』
『牛若武勇始』	『寐物語』	『和氣清麻呂』	『源氏三代記』
『佛舍利』	『源海上人』	『八花形』	『榮花物語』
『五百羅漢』	『粟島御縁起』	『熊野開帳』	『婚禮祝言記』
『伊勢物語』	『源氏供養』	『秘密護摩』	『ゆや物語』

加賀の樂章といふもの略以上の如し。そもく源太夫の西上の後井上播磨の

浪華に於ける加賀の京洛に於ける相並べて雙壁と爲す可し。而も播磨の樂章は量に於ても、傳播に於ても加賀に及ばず。其譜節の妙を愛惜する多く門人を容れず刻本を拒みしかば、偶その曲章を得て京にて梓行せしも、小冊細字にて挿繪を加へ、幼童の翫讀に過ぎず。かの柳亭が見しといふ寛永板南無右衛門正本の類のみ。然るに加賀は貞享二年始て七以呂波五段を四條小橋の壺屋に與へて大字八行の正本に刻せしめ、謠曲稽古本に模して曲譜節章を加へぬ。恰もこれ播磨京都に歿せしと同年のこと。同じく謠曲を能くせし播磨のこゝに出でざりしは惜む可く、加賀の此舉は賞す可し。加ふるに加賀は、東に於ける淨雲と同じく創作の文才をも兼ねしと見え上に云ひし以呂波物語は其作なりといひ、或は松の落葉に載せし「四條河原涼入景」の一曲も其手に成れりとか。後者に就きては聊か疑なきを得ずと雖も、章句中四條の芝居淨瑠璃より祭文、歌念佛、辻談義の盛相に及びて、頗る當時此方面の情況を明にするを以て、参考に資せむ。其脚註に到りては予が例の蛇足なり。

四條河原八景

春過て青葉の梢涼しげに繁る木の間の花うつき夏緑もこくとくに似る可くもなき九重の京の水きはたちつとく四條河原の賑ひは八雲立てふ御歌の神の御氏子家とみて大きに和く秋津洲の大和大陸や大和橋一むらの竹の東雲もや明渡すまきの月の音羽の山にこたましてひびく芝居の朝太鼓あがれさすびの赤前だれすどにたらしまづのめが顔にましくしなふ申札めせはい番機敷ても取てあけまじお羽織もお笠も杖もあづかりてお茶はあとから上げ申入ははやくもはじまりおあし千貫万大夫年をかされて紫呂の龜やは久米の淨瑠璃はめでたいこくの加賀
 搦サア札めせとたきつくるはがまのたきりんくどまやんと結びし胸高帯乗物のてかこどろせき茶帽子御所かづき思ひく伊達委女中勝なる物見なり扱又涼の夕景色神のみたらし結ぶ手に夏なき年とおもひ川水に蛙の聲たてまとのやの寶打けふりかなたこなたに火のやい灯見えそめてほどもなく東石垣四はまたほんどにつとく石垣まらの軒にあらしふ釣行燈上は三條橋の下まも松原のこなたまで流につ空の星月夜天の河原もかくやらん納る御世の太平記あるひは平家物語徒然草辻談義辻能をかしく拍子とり置かぬの山なみみたらしかけうつりうつらふ緑の袖を氷にひたし

三代目万大夫の歌舞伎か或は都越後掾がとか久米は龜屋久米之丞加賀掾はいふまでもあらず宇治加賀ならむ
 水茶屋はくもらぬは太平記は所謂太平記讀平家物語は平家節なり辻談義はかの支考が

てすいしむる。神はうけすやいる祭文、まはらひ清め奉るの色さかりはあづまなる八百屋のむすめお七こそ戀路のやみのくらがりによしなき事を仕出して罪は死罪にきはまりてすぐにひきだすあはれさよこれは戀路の世のうはさ歌につくりてよみうりの手拍子揃ふかさのうちよいよいよい朝日さすまもそりや梅の露きえて残りし其名を問へば花の都におなじみ男戀のなさげのやまとやなりと人もいひしが其名も共に遂に無常の嵐と消えて夢かうづか身の上の響はるかにかちりまとおやまが鬼にうらがへり鬼が佛も南無阿彌陀佛歌念佛、其去程に世の中の人間のめの姿を見せんとて花ひらいてあめす正にまんの智識たりそのかみは露のお山にのりの道今はまげんの中にならふア、あさましや此身はさて沖こ船の楫を絶えいつかたらん涅槃の岸心のつなにまつはれて色にひかれ香にまよひなきけの竹の枝まげきかねのひびきかりんちりんくとおとそふる楊弓齒醫者辻角力おしあひくゆきかよふこいはんしやうのとこゝろてん夏すきあきは祇園まち花をかざりしおどり子の川、これもあたらしふねへ。

『本朝文鑑』に出てたる露の五郎兵衛が盟なる可く辻能は辻にて能を催し見物をよびしものならむ。
 祭文、歌念佛のことは本文別にいふが如し、八百屋お七の火刑は天和三年三月のことなれば此作は天和以後に在らむ。讀賢は既に夙く大坂陣以來あり。
 此の嵐はかのお七を演じて封文の紋どころに典型を遺し、風喜三郎ならむと思ふ。もし然らば此曲少くもこの祭文は加賀死後のものたる可し。疑はし。

四條河原の繁花見るが如し。

章中の嵐を喜代三郎とせば其歿年は正徳三年五月にして加賀の歿後二年に相當す。此一曲加賀の作ならぬは明に齋藤月岑のいへるごとく節附ばかりもなしう可きやうなし。然れども斯る一般の祭文は後の語り歌ふもの、隨意に省畧附加し得可き事に屬すれば必ずしも全部加賀掾が作にあらずとも謂ひ難き歟。但夫加賀多少文作の才ありしは此を以て疑ふ可からざるに似たり。また加賀が樂章に就きては更に大に留意す可きことありて存す。そは從來未曾て有らざりし文豪と樂章との接近せしとなり。加賀は元和十二年の生にて、井上播磨に三歳の弟、浮世草子の開祖井原西鶴より長ずると七歳近松門左衛門よりは十八歳の兄なり。されば西鶴の『好色一代男』の梓に上りし天和二年には加賀年四十八にして西鶴は正に四十一。京浪華遠からず來往易々たれば、彼好色本の作者はこの妙樂匠と相知らざるなからむ。果して貞享二年西鶴は加賀の爲ウ。凱陣八島は嘗て宮崎三味氏のしからみ草紙に掲げしとあり。就きて見る可し。に樂章『曆』の一曲を作り、後また爲に『凱陣八島』一篇を草しぬ。宮崎三味氏の後者に序して『全篇の結構筆法、當時の諸淨瑠

璃に比して頗傑、出の色ありて、又巢林子が初年の作といへるものとも、おのづから行徑を異にしたるを見」といへる、實に左もある可し。而して巢林子近松門左衛門また加賀の樂章を作れり。之よりさき門左衛門は既に井上播磨のために『天鼓』『頼朝七騎落』の二篇を作り與へしが、加賀の爲に作りしところは漸く多く『一心五戒魂』『當流小栗判官』『弘徽殿嫉妬打』『門出入島』『徒然草』『鳥羽戀塚物語』『世繼會我』『遊君三世相』『主馬判官盛久』『團扇會我』等數種あり。假令『一心五戒魂』は『鳥羽戀塚』と爲り、『當流小栗判官』は『今様小栗判官』『團扇會我』は『百日會我』と爲りて、後に竹本義太夫の爲に占められ、『弘徽殿嫉妬打』は『花山院』の改題、『遊君三世相』は『天鼓』の改作増補に過ぎずして、前の井上播磨掾が樂章を取りしとはいへ、巢林子の力を加賀に假せし少からぬを知る可し。貞享より元祿の初年は近松なほ京に在りて、西鶴は浪華に在りけむ。地の上よりいはゞ近松が加賀の爲に作る播磨の爲に作るより多かりしは自然の理なるも、西鶴は播磨に作らずして却りて加賀に作れり。想ふに播磨にしてなほ世に在らば此二文豪に得るところにはかに加賀の下にあるまじき歟。實に西鶴が『曆』をつくりし年は播磨の歿年なりき。

天和貞享の際、井上播磨の名聲遠近に奮ひしかば、其郷里たる京都四條の劇場は之を聘し、播磨は『頼光跡目論』を語りて世の賞賛を一身に集め、相識は贈遺を以て其技の優れしを祝せり。その最得意なる『しほがまの段』『馬の段』の節事聴者を感じしめけむ。而も此際病を獲て起たず。貞享二年五月五十四歳を一期として不歸の客と爲りぬ。門人市郎太夫乃尾崎權左衛門とともに芝居をつとめ、清水理兵衛後薙髮して伴西は今播磨と稱せられしも、ともに妙播磨の後たる能はず。加賀時に年五十一。此機を外さず文豪の新作『曆』を得、始めて八行の正本を梓に上せ、翌貞享三年には播磨亡き後の浪華を風靡せんとにや、其地に丁り、後の京四郎座に入りて『曆』を語り。然るに此に端なく一勁敵を見る。始め延寶五年の春、加賀が未嘉太夫といひて『西行物語』を語りし日、其脇として二段目藤澤入道夜盗の修羅を語りし清水理兵衛が門人五郎兵衛といふ者あり。加賀はその音吐大に、甲乙宜を得しに感じ、後來必ず名を爲す可きは此人なりと感嘆せしが、何ぞ知らむ、後未だ十年ならずして浪華に於て己と對壘せむとは。斯の如き五郎兵衛は何者ぞ。まことにこれ後の竹

エ。法名は夏月了音日弘
墓所は法華宗長明寺長
明寺は何地にや、頂妙寺
か、非か。

本義太夫筑後少掾博教なりき。法をつくりし商君のそれならねど、加賀は己の鑑識不幸にして中り、この對敵に敗れ、加ふるに不幸一夜火を失して損耗少からず、涙を吞ひて京に歸り、幾ならずして加賀の爲に雄大の筆を奮ひし近松巢林子は浪華に下りて専ら義太夫の作曲に従ふに至れり。浪華の地、一び井上播磨を失ひしも、又直に竹本義太夫を得て、斯樂永く盛に、義太夫節は殆んど淨瑠璃樂の全部を代表するまでに精髓を研め、大阪は今に至るまで遂に其根據地となれる實に源を此に發せり。

されば此一敗の後も流石に加賀は雄を京都に稱すると二十年に近く、七十七歳の高齡を保ち、寶永八年の春に歿しぬ。其子宇治宮内此年八月嘉太夫の名を相續し、門人には寛文の竹田若狹が後を嗣ぎし、宇治伊太夫の野田若狹、富松薩摩、立花河内、宇治相模、同若太夫甚太夫等ありて、加賀の後を受く。其淨瑠璃には、宇治一流に

『魂産君観音』 『誓願寺名號記』 『女人即身成佛記』 『傾城今西行』
『傾城八重櫻』 『鞍馬山師弟杉』 『曾我花橘』 『玉黒髮七人化粧』
『南都御影森』 『念佛往生記』 名『大原問答青葉笛』

此『寄葉笛』も近松作歟。
寶永七年竹本座にて興

『忠臣身替物語』 『遊行念佛記』 『伊勢御遷宮』
『傾城浮州岩』

行し近松作とあり。
『忠臣身替物語』は「金
平法問評」の改作ならむ。

富松薩摩に

『西明寺殿行脚松』 『傾城姿見池』 『夕霧篋の袂』 『富士浅間舞樂諍』

『今様いろは物語』 『辛崎一本松』 『白髮壽命髮置』伊藤流 『梶久狂亂笠』

『八幡宮和光白幡』 『三井寺豊年護摩』 『大黒天万寶御藏』 『南大門秋彼岸』

『愛宕山旭の峯』 『大和歌五穀色紙』 『傾城紋日曆』 『關東小六丹前姿』

野田若狹に

『吾妻歌七枚誓請』 『吉岡兼房染』 『新腰越訴狀』 『灘波五人男』

『龍の都連理鏡』

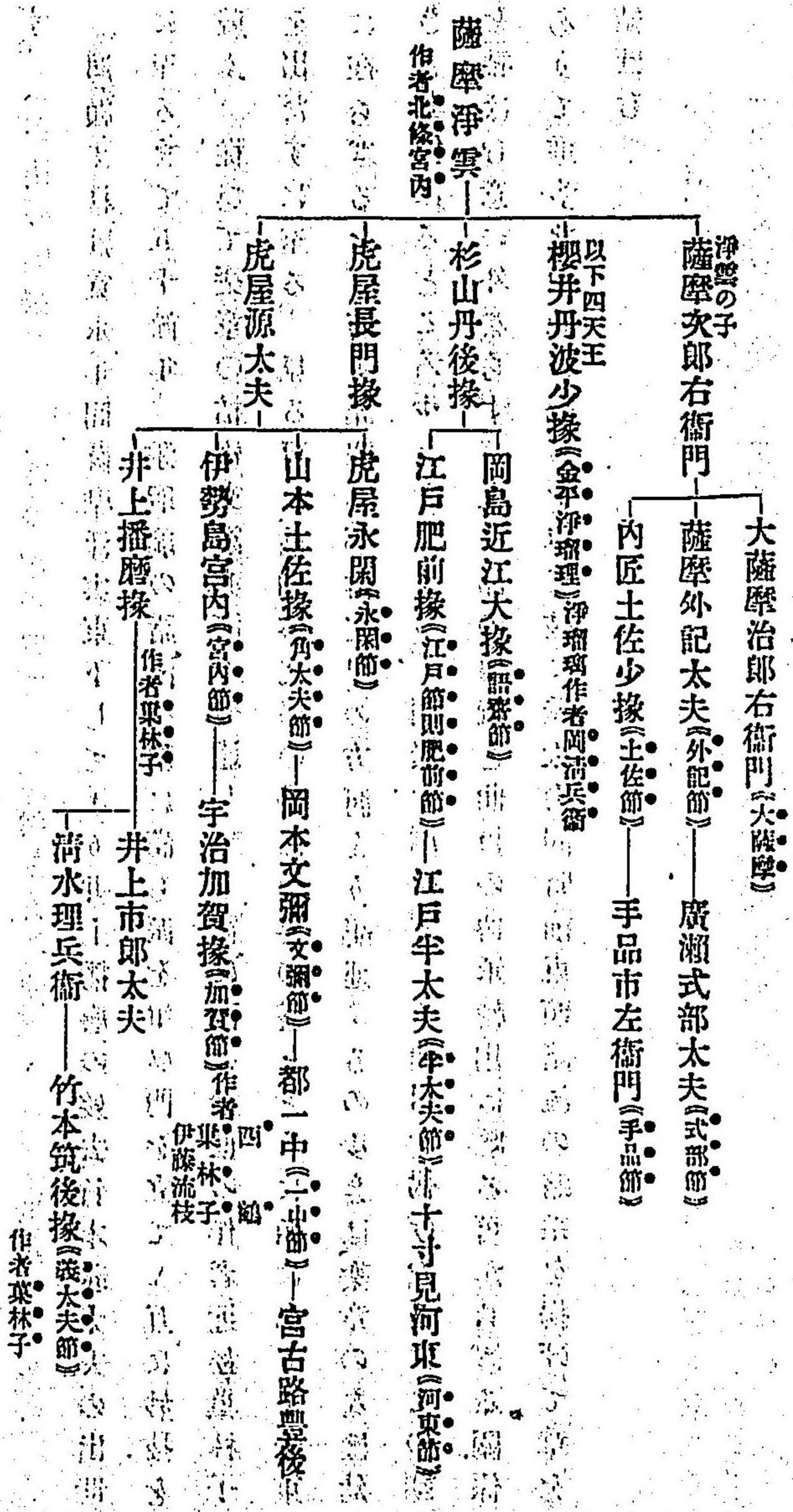
野田富松共にするもの
『石山寺開帳』 『頼政歌道扇』 『傾城我立栴』 『傾城富士嶽』

立花河内に

『忠臣いろは夜討』

あり。但師弟同門の樂章は互に相通じて語りしのみならず、他流の樂章と雖も、或は其まゝに、或は題號をかへ、或は改作して用ひしは當時の通習なるを忘る可からず。

回顧すれば寛永年間薩摩淨雲東下してより井上播磨の歿去竹本義太夫の出世に至るまで五十餘年。淨瑠璃の諸流三都に滿ち派を争ひ門を立て、互に妙技を競ふ。從ひて樂章の結構文辭亦漸く發達し來り終に西に穉世の作者近松巢林子を出だすに至る。見る可し前期俗文學の盛は樂界の盛とともに西にありて、未東に在らざるを。而も此間わが俗文學の方面より記述するの少きは、樂章のなほ幼さと其傳はるところ少きとによる。間繁を厭はずして曲目を掲げたるはこの闕を補はむ意に外ならず。又樂節の傳統と曲目の傳承轉用は離る可からざる關係ありて、進歩また此に繋るを以て、茲に義太夫同時前東西諸流の略系を掲げて章を結ばむ。



第二章の三 門左海音時代の竹豊淨瑠璃

世は徳川の流正は旺洋として常憲院時代の華奢風流の春貞享三年は約四十
 年を経て有徳公の盛治の下に享保九年に至るまでを浪華淨瑠璃曲の黄金時代と
 謂ふ可也。貞享三年は義太夫淨瑠璃の祖竹本義太夫がはじめて浪華の樂界に立
 ちし年享保九年は空前絶後の淨瑠璃曲作者として藤童趨卒なほ知らざるなき近
 松門左衛門が隔世の人を爲りし年なり。その前半期は竹本座ひとり浪華斯樂の
 覇柄を握り其後半期は豊竹座起りて紀海音が後進を以て對抗の地を作らんとす
 る二十年餘近松の長逝とともにまた筆を淨瑠璃の作に絶てり。出雲千四の宗輔
 蛙文に對立せるなほ竹豊二座の盛を見るも之を門左海音の時代に比すれば所謂
 黄金時代を去りて白銀時代に入るの感なくんばあらず。
 慶安の末年攝津東成の郡天主寺村に生れたる農民に五郎兵衛と呼ぶ者あり。
 稗れ得て昏吐朗情にして好んで當時京阪の間に流行せる淨瑠璃節を語り學び遂
 に一時浪華の斯樂界を風靡せし井上播磨が門下の高足清水理兵衛に就きてはじ

めて樂界の一員と爲り、理兵衛が『上東門院』の曲を語りし日その脇を勤めしを五郎兵衛が樂床に上りしはじめと爲す。理兵衛がよく師播磨の樂風を傳承して之に酷似せしは、師の歿後世に今播磨の名を得しにても知らる。されど其技尙精しからずして、世間の喝采は瞬時にして去り、樂場を閉づるの已むを得ざるに會す。五郎兵衛が置に其門を出て、奮然身を挺んで、上京し、自ら清水理太夫と號して四條の樂場に『日本王代記』松浦五郎旅日記の數曲を語りしは何ぞ大膽なる。若し世に傳ふるところの年紀信ず可くは五郎兵衛の理太夫が大阪に竹本座を設けし貞享二年乙巳は井上播磨の歿年にして、而も其歿去に先つと三ヶ月なり。或は之を一説によりて翌貞享三年と爲すもまた播磨の歿後數ヶ月なり。二者何れにするも、理太夫が四條に『日本王代記』の五天竺のふしとを詠へんとせし京人の耳朶には、其師の師にして名聲一世を傾倒せし井上播磨が最後の語物『頼光跡目論』のしほ釜の段、馬の段の面白き遺音尙存せるなり。あらず、或は病める播磨は褥床の間に此後進無名の理太夫の擧を聞きて、技藝を愛むと吝なる心に、いかに驚きたりけむ。胡爲ぞ理太夫の膽しかく藝の如き。想ふに必ずや心裡深く自負ふとこ

ろなくんばあらじ。果然其技の未熟せざりしに因るか、其名の未行はれざりしゆへにか、幾ならずして場を鎖すに至りしも、警眼なる宇治加賀のために夙くも技の凡ならざるを識られて、其脇をつとめ、『西行物語』の二段目藤澤入道夜盜の修羅を語りて賞賛を博しき。或はいふ理太夫が加賀の芝居に力めしは早く天和中に在り。要するに天和、貞享の間、京攝の間に名を揚げし播磨、加賀に直間接に負ふところ深かりし理太夫は、忽また技藝のことにて加賀と隙を生ぜし竹屋庄兵衛に伴はれて遠く西國に下りしが、この漂泊の日井上宇治二家の樂風に就きて深く考ふるところあり。以爲く、播磨の樂風は地の節長くして音を表に立て、節を裏に誥むるに反し、加賀の一流は地節短くして聲を後にして節を重んじて甚細巧なり、ともに未だ全しといふ可からず、いでや播磨の長きを縮め、宇治の短きを延ばし、音節の表裏長短宜しきを得て序破急を定めて一家の風を立てんには、天下の樂門をたわれに比す可きものなからむと。是より日夜工夫を積み、練修を重ね、忽にして捲土重來、貞享二年の春は浪華の道頓堀に葦葭の節の長さ短き自家特得の名も、義太夫と改めて一派の樂風、後の世までも竹本の流たえせぬ源を發し、始ての語り物は、

加賀が樂章『世繼會我』なりき。實にや義太夫節が今もなほ淨瑠璃諸派の覇柄を握りて、或は淨瑠璃則義太夫節と爲す者さへあるは、實に義太夫が井上宇治の兩樂派を會滙大成せしに由らずんばならず。因にいふ、理太夫が竹本と號せしは寛文の竹本若狹の系統に發縁せしにや、其來由今にして詳にし難し。前年播磨の歿去によりて京都樂門の權を收めたる宇治加賀は竹本義太夫が新に大西の芝居に名を掲ぐるを見て太く驚き、速に之に勝たずんば勁敵の患を後に貽すとや思ひけむ、その年直に大阪に下り、かの西鶴が作といふ『曆』を語りしに、義太夫は『賢女の手習新曆』を語りて之に對抗競争せり。その結果加賀の敗に歸せしかば、加賀はまた西鶴の他作『凱旋八島』を出だして、稍前敗を復せしも、不幸樂場舞馬の災に罹りて、斷然意を決して京にかへりぬ。因にいふ、『凱旋八島』は一般に西鶴の作なりとなすも、近松の署名ある刊本ありといへど、こゝに『益村氏の真中』には尙一般の通説に従はむ。想ふに加賀がこの一敗は、唯に加賀をして長く浪華の地を竹本義太夫に委せしめしのみならず、また松壽軒をして淨瑠璃作者の地を全く巢林子等に檀にせしめし、動機にあらずとせんや。見よ『曆』と『八島』とい

ひ、加賀が大阪に於て語りしものはともに西鶴の作にして、其他に西鶴の作といふものなきに、此に新に義太夫が語りし『世繼會我』は加賀の樂曲とはいへ、近松の作にて、また爲に『出世景清』を作り與べて、漸く加賀と離れんとするも、近松門左衛門ならずや。予をして空中に樓閣を現せしめよ。加賀と義太夫と若し地を代へなば、誰か知らむ、大阪なる西鶴は、また京なる近松の下阪を待たずして、幾多の淨瑠璃を遣しだりけむ。試に思へ、『曆』『凱旋八島』のなりし時は、『好色一代男』『好色二代男』の由て、西鶴が十年述作の最初期に外ならざりしを。上來淨瑠璃樂の興起、傳統、盛衰を説くことの稍詳にして、其樂章の文を論じ、詞に及ぶ稀なりしは、樂統に重くして、詞曲を輕んずるにあらず、未だ文學史に入る程の樂章なかりしを以てなり。暫く之を例は、近松以前の淨瑠璃は猶西鶴以前の假名草紙の如けむ、多くいふに足らざるなり。請ふ少しく溯りて、義太夫と遭遇せざりし前の近松の素性を改め見む。昔ホメロスの詩は天下後世の仰ぎて金玉の聲ありとなし、ところなれども、沙翁の諸作は東西諸邦のみな天才と推すところなれども、其傳記やともに詳なら

ず、密ならず。請ふ比倫の大小、輕重を失せりと咎む勿れ。わが元祿文學の大家を
 といはゞ皆、浮世草紙に西鶴あり、淨瑠璃曲に近松ありといはんも、西鶴の生涯明な
 らざるが如く、近松の事蹟も著作以外に詳ならず。豈に上聲ありて迹なきは天來
 神秘の妙音ならずや。傳へいふ、門左衛門は相森氏、幼名は藤四郎といひ、長州萩の
 人、少にして肥前唐津の臨濟宗近松禪寺に入りて僧と爲り古洞と號し、夙に穎悟強
 記を以て鳴りしが、一朝事を以て細林を出て平馬信盛と稱し上京して一條家に仕
 へて雜掌と爲り從六位に叙せらる。これ世間普通に認められたる門左衛門が前
 半生の略經歷なり。その故里の如き、或は出雲近松村といひ、或は越前、或は三河、或
 は近江といひ、或は周防の山口にて父を松村八兵衛といふといひ、或は長州大津郡
 深川村の生となし、その寺院も江州高觀音の近松寺御坊なりとし、その桑門を捨て
 たる理由も、之を崇拜する者は一寺一塔裡の弘教宣法は衆生化度の功德廣大なら
 ざるを觀破せしに因るとし、之に事由を托するものは同窓の僧罪ありて寺門に刑
 せられしを感じ、名も之によりて門左衛門と號すといふ。諸説紛々適從するところ
 を知らずと雖も、代々甲冑の家に生れし身の墨染の衣に朽ち果つるを屑とせず、

年尙少壯の血氣抑へ難くて出身の地を京洛に求めしに似たり。蓋し其兄弟の一
 たる相國寺の宗長老、他の一にして舅家を繼げる岡本一抱はまた京に在りしかば、
 此等の縁故を以て門左衛門も上京せしならむ。其前後は
 知らず、妹錦江も亦大阪に住して俳諧の女宗匠と爲れり。
 細流醫界文學者たり、また兄弟姉妹一人の甲冑の家を繼ぎ
 しを聞かざるを見れば、その家は早く流落したるにや。一
 抱子が味三白の高足を以てして、細行修まらず師弟の義を
 絶たれ、筆を呵して諸書の諺解數十部を著はし、を見れば
 之と同根の生をうけ之に寄寓せし門左衛門が卓落不羈途
 に久しく香煙の間に埋もれ仕官の下階に屈膝する能はざ
 るを想見す可し。乃幾ならずして仕途を辭したる門左衛門は市井に放浪して歌
 舞伎淨瑠璃の作に筆を染め初めぬ。

同胞に長老あり、學醫あり、俳女あり、其身は幼にして佛門に入りたれば略内外二
 典に通じたる可く、長じて當時なほわが邦學問の藪淵たる京都に縉紳の家に仕へ

ル。岡本爲竹、號は一得齋、
 味岡三伯の門下の高足
 にして細行修まらず、遂
 に師弟の義を絶たる、乃
 別に一家言を立て博く
 諸書を涉獵して諺解を
 作り、専ら淺學を啓發す
 るを以て自任す。其著者
 雖諺解、大成運氣論
 諺解以下數十部あり。ま
 た健筆博採の醫學者た
 りと謂ふ可し。

たればまた故實典禮歴史物語歌謡雜藝諸般の國學に得るところ多く加ふるに東西に遍歴して人世の風浪に掀弄され備に塵界の艱苦を喫したれば人情の委曲風俗の良否をも詳にしたらむ。天和貞享の際年而立に達せし門左衛門が前半世の流離變轉と失敗窮乏はその學文に資縁淺からざると相待ちて最人世詩人たるに適したりけむ。況んや時世は漸く斯種の詩人を要するの運に會せしをや。

門左衛門はじめは歌舞伎狂言の作者たりき。當時の名優坂田藤十郎が當狂言『夕霧名残の正月』は夕霧最期の翌月、則延寶六年二月に塲に上りしものにて夕霧の狂言の最早きものなるが實に近松門左衛門の作なり。されば近松が市井に放浪せしは遅くも延寶六年にして、年紀二十六なりき。下りて元祿元年に藤十郎と水木辰之助が狂言『今源氏六十帖』辰之助が同四年に江戸へ下るる名殘狂言『水木辰之助饒振舞』ともに皆近松の作にて、『今源氏六十帖』は辰之助東下の後『四季御所櫻』と改題して市村竹之丞座に演じたる猫の狂言なり。また『四季御所櫻』の大詰に演ぜし槍どりの文句も

レのち近松が寶永七年竹本座の爲に作りし夕霧阿波鳴戸あり。こは延寶六年の歿去より餘も三十三回忌に作りしものにて、此名殘の正月の縁によりしと疑ゆ。辰之助が猫の狂言槍どりの事は近世奇跡

亦門左衛門の手に成れり。なほ近頃探り得たるは近松の辰之助の爲に作りしものに『曾我太夫染』あり。元祿の頃辰

考に見ゆ、その近松の署名ありといふは當時三味氏の談なり。

之助の名聲甚籍にて、そのつねに着用せし染絹を辰之助染と稱してはやしめかば『太夫染』とは名付けむ。されば延寶の『役者大かきみ』には『置かしたるもの南京のあやつり、近松が作者づけ』といひてその自負を誹り、寛延の『役者大全』には『都萬太夫芝居へ近松門左衛門ありつき、藤壺の怨靈、直に藤の花が大蛇となる工夫より門左衛門く』とてはやしぬるともに近松が既に歌舞伎作者として名聲あり、勢力ありしを見る可し。斯く延寶以來歌舞伎狂言に力を盡くせし近松は、既に述べしがごとく播磨宇治等の爲に淨瑠璃の樂章を作り與へしが大坂に竹本座起るに及次、これとの關係年とともに繁く遂に居を浪華に移して四十年の後半世を淨瑠璃作者に過すに至りしが、さりともなほ直に歌舞伎との關係を絶ちしにあらず。金子吉左衛門とともに、かの藤十郎の爲に『佛が原』を作りしが、とき其間の消息を窺ふ可し。されば朝陽強ちに侵さずと雖も、殘月自光を失ふと古くよりいひぬ。淨瑠璃の作漸く繁くして歌舞伎との關係は自薄らぎけむ、天下後世をして近松は

たゞ淨瑠璃作者のやうに思はしむるに至りき。門左衛門は既に歌舞伎作者にしてまた淨瑠璃數曲を作りしが、貞享三年竹本義太夫がはじめ大坂道頓堀大西の芝居に後の竹本座を起し、『世繼曾我』及び『一心五戒魂』頼朝七騎落』など連りに近松の諸作を語りしかば當時なほ京に在りし門左衛門は新に『出世景清』を作りて之に送りぬ。是ぞ門左衛門、義太夫の二名家結托の發端にて義太夫樂が出世の緒なりき。二月義太夫はじめて近松の新作『出世景清』を場にし、五月に至りまた加賀の樂章にて近松の作なる『遊君三世相』を語る。爾後元祿三年に至るまで竹本座の場に上りし淨瑠璃には作者詳ならぬ『達磨の本』地『貞享四』、『大塔宮熊野落』元祿元、『定家卿小倉色紙』今様柏木』同三、『自然居士』『源十氏二段』、『讚談記』ともに元祿三の數曲及び近松の作にては『佐々木大鑑』一名『佐々木先陣』、『多田滿仲記』ともに貞享三、『源氏冷泉節』元祿元、『天智天皇』同三の四種之に『出世景清』を加へて五種に過ぎず。想ふに近松は此頃はなほ歌舞伎狂言にたづさわりの全力を淨瑠璃樂曲に盡すに迫らざりけむ。また若くば純然作者を以て自任するまでには至らざりけむ。然れども作者たる可き運命はまた回す

可くもあらず。歌舞伎淨瑠璃兩面の成功と稱賛とは遂に門左衛門をして寄家岡本一抱子より自立せしむるに至れり。一日一抱子、門左衛門に謂ひて曰く、兄奇才を抱きて務むるところは則演戲雜著世に於て益なし、豈惜むべきの甚しきならずやと。門左笑ひて答ふらく、吾子を觀るに亦猶是の如し、常に砒々諺解に従事す、われ恐くば後世の末學淺に因り近に就き復本書を研究せざらんことを、若し一字一畫の升誤あらば鹵莽の術、人命を誤るに至らん、豈わが狂言綺語世に益なきもなほ人に害なきの比ならむと。一抱子さして理に服し、方に草したりし『素問諺解』の稿を棄つと。焉ぞ知らむ、一抱子もまた諸諺解の外、別に『北條時頼記』の著あらんとは。斯くて元祿三年庚午正月、門左衛門は義太夫の招聘に應じて大坂に下り、竹本座に入り、翌四年水木辰之助は東都に下りて市村座に喝采を博しぬ。茲に訝かしきは元祿三年の春、竹本座に入りし門左衛門が同五年に至るまで何の作樂あるを聞かぬとなり。辰之助が名殘狂言も其作といへばなほ歌舞伎の關係に忙しかりしか詳ならず。

竹本座は始より近松と縁故深かりしも、その樂曲の作者詳ならぬもの若干ある

を見れば近松以外に爲に作曲せしものありしや疑なし。『外題年鑑』に列擧せしところを通覧するに近松以外の署名作者に『愛子若都富士』元祿六、正月の作者辰松幸助あり、『東海道虎が石』元祿十二、五月の作者に錦文流あり。想ふに上に擧げたる作者不詳の諸曲、さては元祿六年以後の『平假名太平記』元祿六、『辨慶出生記』同七、『齋藤別當實盛』多田院開帳『共に同八』、『當麻中將姫』義經追善女舞『共に同九』、『那須與市小櫻威』新板腰越狀『共に同十』、『小野道風記』義經東六法『共に同十一』等は後に傳はらざる諸作家の手に成り、若くば他の古浄瑠璃より翻案され、改題されしと例之ば、『今様柏木』の『金平法問評』の改題なるが若く、『百日會我』の『團扇會我』の改題なる如き妙からじ。また之と同時に他流の浄瑠璃にて竹本座に興行されしものに宇治加賀の浄瑠璃、忠信廿日正月、元祿九、『源氏鳥帽子折』同十二年等あり。而して近松が浪華に下りて後の新作には元祿五年の『日本西王母』を初とし、同十三年に至るまでに『新本領會我』元祿六、『松風村雨束帶鑑』同七、『釋迦如來誕生會』鎌田兵衛各所盃『共に同八』、『頼朝伊豆日記』同十、『今様小栗判官』同十一、『浦島年代記』同十三等の九曲ありと雖も未だ十三年以後の如く繁多ならず。此際注目す可きと

は元祿十二年秋八月紀海音が始めて豊竹若太夫其頃竹本采女の爲に『傾城懷子』を作して、後三年にして起る豊竹座の萌芽を生ぜしと、翌十三年門左衛門が始めて『長町女腹切』を出だして世話物に着手したると、之よりのち享保九年近松の歿去に至るまで竹本座の浄瑠璃は殆んど皆門左衛門の手に成り他人の手になりしものは置に九分の一にすぎざると等是なり。しかも近松の作は寶永正徳に入りてもなほ王代物、時代物多きを以て、その時代世話の變轉比較を論ふ前に、少しく豊竹座の由來を述べむ。

竹本座起りて茲に十又五年。その江州、泉州、京都、奈州、伊勢、中國、四國の地方巡業を除きても四十回以上の興行を重ね、義太夫の妙技は近松の詞曲と相待ちて、太く世の賞賛を得たらんも、其間世間また何等の變化なからんや。後に竹本座と對抗する豊竹若太夫は漸く頭角を揚げんとす。大坂南船場、河内屋勘右工門といふものあり。少年にして浄瑠璃を好み、義太夫の門に遊び、十八歳にして竹本采女と號し始めて樂場に上る。恰も元祿十一年なり。その語物詳ならねど、恐くば『新兵庫鑓嶋』が否歟。翌元祿十二年には連りに宇治加賀の古浄瑠璃『東山殿子日遊』、『源三

位頼政』井上播磨の『大職冠智略玉取』等を語り、その秋竹本座の備中宮内藤州宮島等へ赴ける跡にて、八月二十八日を初日に語りしこそ實に紀海音が處女作『傾城懷子』なりけれ。恰もこれ錦文流が淨瑠璃の初作竹本座に上りしと同年にして猶十餘年前義太夫の近松に於けるが如き關係の竹本采女と紀海音の間に生じ始めてき。こゝにむかしきは豊竹座の祖采女が義太夫と同じく大坂の産なるのみならず、其作者たる可き海音がまた門左衛門のごとく一び細流に在りしとなり。海音は誰も知れるごとく、鯛屋貞因の子にして油煙齋貞柳の弟なり。初の名は喜右工門、後に善八と改む。和州柿本寺に入りて黄樂宗の僧と爲り高節といひしが、還俗して大坂にかへり醫を業とし、傍僧契沖の門に入りて國學を修めて鳥觀齋契周と號し、兄貞柳に従ひ狂歌を好くしては貞我庵貞峨と號し、後には父の業をつぎて道頓堀太左工門橋筋に菓子屋と爲る。士人にあらざれば僧道、醫家、これ當

リ。推年代記によれば十八歳は元禄十二年なるに似たれど、明和元年、八十四歳にて歿せしを信憑す可しとして推算すれば、一年の差あり、いかゞにや。

鯛屋貞因は榎並氏、名は善右衛門、浪華の菓子商、安原貞室の門人、長閑堂、白后齋と號す、元禄十三年卒す。享年八十。八丁目寺町寶樹寺に葬る。貞柳は名は喜八、また

世文藝學問の樞機を握るもの、近松も海音もみな同じ流の末に出てしは恠しむに足らざる歟。しかも其處女作は失敗して、竹本采女の興行しかく、の功なくて其年も暮れ、翌れば元禄十三年道頓堀東立慶町の芝居にて采女は道具屋吉左工門、永島重太夫、其門弟等數多集りて素淨瑠璃の出語を爲し、もまたはかくしからず。想へ去年は、一も新作を出さざりし近松門左工門の、此年は春より『浦島年代記』『長町女腹切』『淀鯉出世流徳』等を作りて竹本座に上し、五十一歳の老功、義太夫の妙音を弄する道頓堀に、二十歳に足らぬ采女が素淨瑠璃の失敗したるは當然の事のみ。况んや『女腹切』は近松が初めての世話物といひ、場處は芝居より程近き長町、時は置に百日前の去年八月の事件なるをや。且之につぎし『淀鯉出世流徳』も亦近在の世話事件たるをや。あはれ采女は興行半にして場を閉ざして田舎へ落ちざるを得ざりき。しかも一少年を以て堂々たる師家と對抗せん意氣健氣なる俊才は此少挫折に屈するものにあらず。泉州堺南の端にて興行せる折しも、ところの絲屋の女手代久兵衛と密通あらはれ、万代とやらん

忠兵衛、油煙齋、嶋杖子、助榮亭、長生亭、珍菓亭、清雲洞等の諸號あり。狂歌に二世豊藏坊信海と號す。享保二十年歿。享年八十一。下寺町傳光寺に葬る。

へ欠落して畑中の井戸に情死を遂げし珍事あり。近く竹本座の『長町女腹切』に成
功したるを目睹せし采女は之を聞くや奇貨用可しと爲し、俄に一段淨瑠璃に作
らし『心中泪の玉井』と題せしがば、果して意外の喝采を博す。時機失ふ可からずと
采女は直に夫坂に歸り長門九郎兵衛と相座元にて前の芝居に稽幕名さへ豊竹若
太夫と改め、表看板花やかに、前は『末廣十二段』切はそのまゝ、『堺土産心中泪の玉井』
と掲げ出しぬ。作者はやがて紀海音にて時は元禄十五年五月二十八日。これ立
慶町豊竹座の起源にして道頓堀操座東西對峙の始なり。あらず、義太夫節諸座並
起の先蹤とやいふ可からむ。然れども之を他の一面より評せんか、既往十五年間
に義太夫淨瑠璃の盛なる道頓堀の東西に二座の並存を容れ得るまでに世の好尚
に叶ひきと謂ひ得可し。若し然らずとせ、尙假令其才俊れ其技秀てたりとも、別
に新に二ふしを爲したりとも見えぬ、豊竹の幾世か竹本以外にさか行く可しとも
覺えず。かの二座の盛衰消長の如きは素より對抗競争に由る必然の勢のみ。

豊竹若太夫が地方に流落せる間、竹本座にては元禄十四年五月義太夫受領して
竹本筑後椽藤原博教と號し、近松はその受領ひろめの爲に『蟬丸』を新作し、次て九月

狂言には前に『十二段長生島臺』切に『大掛物十幅對』十一月には『曾我五人兄弟』、翌
くる十五年の正月には前『傾城八花形』切、豊年富貴萬歳』みな近松の新作なれば想
ふに相應の喝采を以て迎へられしならむ。正月狂言打揚の後竹本座は伊勢はゆ
きしに、其の處に乗じて立慶町に豊竹座の設立を見るに至りぬ。されば伊勢より
かへるや竹本座はまた近松の新作『大磯虎雜物語』をしかも豊竹座の初興行『末廣十
二段』『心中涙の玉の井』と口を同うして場に上しぬ。對抗の勢見る可し。記録は
此第一對抗の形勢如何を云はざるも、『涙の玉の井』の世に歓迎せられしを想ひ、『雜物
語』の反響をさかねば新奇に奔る人心の豊竹座の利となりしや殆んど疑なし。ま
しや勝敗の別なくとも、少くも對立の根據を得るたけの利ありしならむ。それが
あらぬか、竹本座はまづ狂言をさしかへ、七月十五日近松の『加古教心七墓巡』を出し、
豊竹座は半月の後前は近松の舊作『源氏烏帽子折』なれど切は作者不詳の『金屋金五
郎浮名類』に、まことに小さんと我中はあのほりづめの二つ井戸、どちらを見ても深け
ればと、太く世間の喝采を博しぬ。こは當時有名なりし額風呂次郎右主門が抱へ
の湯女顔の小三が上なりけむ。次て九月九日の節供を初日に『東岸居士』及び海音

の第二作『小野小町都年玉』を以て西の『新一心五戒魂』近松作歎に當り、十月には海音の第三作『新百人一首』翌元祿十六年正月には第四作『新板兵庫築嶋』二月には第五作『今様殺生石』と引つゞきて竹本座に息をもつかせず。或はいふ、西澤一風の『井筒屋源六戀寒晒』もこの正月の淨瑠璃にて大入なりきと。要するに新進の意氣旺に、老成の竹本座に對抗せんと奮勵盡瘁せる様見る可し。而して竹本座は此間一びも興行せず、静まりかへりて在りしが如く、春も末になりて豊竹座が泉州堺へ出興行せる間に乘じて、三月近松の『西明寺殿百人上臈』を演じ、かへり來りし豊竹座が五月上旬また海音の新作『坂上田村麻呂』を場に上すを見て、此方は『日本王代記』を前に、切は有名なる近松傑作の『曾根崎心中』を出しぬ。

思へ、豊竹座起りて置に一年、假令舊に倦み新に趨るは浮きたる世の人情とはいへ、老熟圓滑なる筑後の妙技と詞華精麗なる巢林子の靈腕とを以てして稍もすれば若太夫、海音の後に墮着たらんとするを見ては、竹本座たるもの轉世間の信用を疑ひて自省るなきを得んや。過去一年間豊竹座の題目を見よ。その初興行たる『末廣十二段』は置に八ヶ月前竹本座が出し、近松の『十二段長生島台』と異工同材、源

氏烏帽子折』は近松の舊作、『新百人一首』、『新板兵庫築嶋』は宇治、井上の淨瑠璃を藍本としたるに過ぎざるに、其浪華の觀客をよるこばし得たるは、實に『涙の玉の井』、『浮名額』もし『淨瑠璃譜』の説によれば、『戀寒晒』等の心中世話物ありしが爲ならずや。

實にや讀賣、歌祭文、好色本、さては坂田藤十郎等の濡事を歡迎し、喝采する元祿の社會風尚は世話物心中に趨らざるを得ず。早く『長町女腹切』に經驗を得し竹本座の、豈此賭易き消息を解せざらむや。恰もよし元祿十六年四は此心中ありてよりお初天神といふにや。

月二十三日曾根崎は、お初天神の社内にておはつ徳兵衛の情死あり。近松直に筆を呵して淨瑠璃三幕に仕組み、五月七日を初日に『曾根崎心中』の外題を掲げぬ。其間置に半月を出せず。自ら傲然千古の文豪、王者の師を以て一世を睥睨せし物徂徠をして感嘆措く能はざらしめし名文句、『此世の名殘、夜も名殘、死にゆく身をたどふれは他しか原の道の霜一足つゞに消へてゆく夢のゆめこそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の七つの時が六なりて、残る一が今生の鐘の響の聞きをさめ寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も空も名殘と見上れば雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る星の妹背の天の川、梅田の橋を鶴の橋と契りて何時までも我と和夫は女夫

星必す添ふとよりすがり、二人が中に降る涙、河の水嵩も増る。哀は二百年後なほ紙上に聲あり、絃上涙あり。元んや耳に噂を聞きて十數日、筑後が圓轉滑脱の老熟の妙音に語るを聞く。浪華滿城の士女巾を濕して、頃しも皁月の空曇り、道頓堀に泣の涙の雨をや降らしけむ。世に此「會根善心中」を以て近松世話浄瑠璃の始と爲し、前に「女腹切」「出世瀧徳」あるを願みぬは、たゞに其心中たるが故にあらじ。「女腹切」は事變と興行と百餘日を隔て、老婆の死、これは十九と二十五の若き男女の血じほも乾かぬ半月のほど、人情の厚薄、同情の多少、さては新に趨る世の習に加へて、其作も亦後者の遙に前者の前に傑出したればならむ。「操年代記」にこれと「涙の玉の井」とを並べ論ひて、「兩家同じ様なる仕組、何れも浪華の若衆に喜ばれ、京大阪の浄瑠璃本屋、門を並べてこの稽古本を板行せり」と。世を擧げて喧傳し、戸絃家誦の繁に耐えざりし態推知す可し。

或はいふ、當時歌舞伎芝居の發達せしため、筑後は浄瑠璃樂の或は哀へんことを恐れしかば、菅公洞畔の落花を弔してこの「會根崎心中」を採れりと。實にや樂を聴く耳よりは科を見る眼の多き當世には、歌舞伎の浄瑠璃界を威壓せしとも少からじ。

しかもわが僻見を以てすれば、對歌舞伎の外患よりは、對豊竹の内憂こそ更に切に筑後が急場なりしならずや。いな、敵は豊竹にもあれ、歌舞伎にもあれ、實は元祿社會意慾の要求のみ。この要求に應ずるもの則優者たり、勝者たり。「會根崎心中」の一舉は能くこの意慾に接し、要求に應ぜしもの、竹本座をして大呂の重を爲さしめ、巢林子の名世に奮ふ此の一轉振に在りき。事は偶然にして、勢は必然のみ。然らば坂田、水木の爲に幾千の狂言を作り、二十年来、浄瑠璃作者たりし近松は何が故に此に至るまで手を世話物心中物に着けざりしや。作に於ても、樂に於ても世話物は時代物より難きが故なり。史材若しくは史材に屬す可き過去の事件を演ずるは、始より想像に訴ふるを以て、聽者の之を識別すると素精ならず、適ま其想像の及ばずして現社會に接觸する一面の失敗も、幼き聽者には却りて相識の鍵輪となりてたゞへらるゝとすらなきにあらず。今日に在りては斯る場合なからんも、當時に在りてはこの時代の別みだれて興味を削ぐをとがめ得ざりし、證迹歴々たり。また之を觀る方面よりいはゞ、偉雄麗姫の姿、神變不可思議の超人的事蹟も、かへりて雄渾瑰麗の妙ありとして喜ばれ、世話物の眼前の社會を寫すよりは、歡迎

せられたるは、當時傀儡に目を消する徒の實情ならむ。之に反して現社會を活寫せる世話物を出さん歟、聽者批評の力なくとも、なほ直に之を目撃親接せる己が社會に引くらべて、是非甲乙を論ひ得可し。死んや眼に觀るところは殆んど家常の凡庸社會の常事、何等の奇異麗瑰なきをや。幼稚なる客は興味索然たる可し。されば樂手、作者は先時代物に着手するに利ありて、世話物に指を染むるを難んずるは當然なり。更に他の方面より觀ん。從來の諸歌謠淨瑠璃は多く時代物なり。未現下の社會を活寫して絃に上し調に入りしもの尠し。世は時代物をさくになれて社會現下の樂に入る可きを解せず、甚しきは世俗の常事樂の快を爲さずともなしたらむ。斯る際に方りて作者は舊套を逐ふて英雄美人を使役し、樂手は節調幾年の試を経て完き舊淨瑠璃を繰返すの易々たるを知らば、成功疑はしき新境に入るの危きに敢てせざらんとす。更に歌舞伎と淨瑠璃との關係より曰はむ。歌舞伎の演者は人にして白は演者各人の肉聲の言語なり。淨瑠璃に在りては然らず。動く者は傀儡にして情の表現なく、語るところは一人の語る樂曲にして、節奏によりて美人たり英雄たらしめざる可からず。其間の難易懸隔多太なりとす。

また他の方面より論ぜんに、技は漸を逐ふて進み、文は年を経て熟す、未初より老熟大成せるあらず。略一定の圈裡に在る過去の往蹟を摸索するは青壯の士も必ずしも難しとせず、人間現世の至微の情意を推擦するは老成人と雖も洵にやすしとせんや。社會要求のなほ幼なかりしのみにあらず、筑後の技と近松の筆とまた初より神あるにあらず。之を要するに二十年の日子は以上の關係を漸次轉變進歩せしめて、茲元祿の末年に至りこの一開展を致し、なり。『曾根崎心中』出でしとき、竹本筑後は五十三歳、近松門左衛門は其二歳の弟なりき。因て想ふ、豊竹座の若木夫は此年甫めて二十三歳、よく竹本座の外に立ちしものは四十を超えし海音のあればいか。

元祿十六年は近松の爲には名譽ある年なりき。徂徠を感ぜしめし『曾根崎心中』は三十年の後、豊竹越前の出語にかゝり、三月興行の『最明寺殿百人上臈』の句は長くも靈元上皇の厭威を賜はれり。『百人上臈』は前後支離して、忌憚なくいへば一個の悪作なり。後段はその文さへ謠曲の『鉢の木』を其まゝに寫したる、斯る種類のもの、は間々まれど、飽かぬ心地のせらるるに、流石に近松は文に巧なりき。蝶遺粉翼輕

難拾鶴墜霜毛散未轉といへる石曼卿の詩句を和らげて「蝶の翼のあしろいを草にこぼして梢には鶴の霜毛をぬきかくる雪は花より花多き木曾の深坂の谷風は吹けども袖に寒からず」といへる上皇の嘆美に遭ひし所以なり。然れども史家にとりて最重んず可きは斯る嘆賞の名譽にあらずして、淨瑠璃界に一新生面を開きしことなり。

翌寶永元年竹本座の外題を検するに、正月は前は作者未詳の『荏柄平太』に切は近松の『源五兵衛』、まゝん陸摩歌、四月狂言は近松の『甲賀三郎』に切は「あふさ徳兵衛心中重井筒」なり。小まん源五兵衛の情死は元禄九年八月なりといへど、既に西鶴の『好色五人女』に其事蹟あればいかゞにや知らず。あふさ徳兵衛の情死はこの年三月二十九日の事實といへば、また「曾根崎心中」と同じく半月の急作なり。豊竹座にては去年海音の『忠心青砥刀』、信田森女占、作者未詳の『熊谷三ツ子』、年改まりては『佐々木大鑑』の増補にて間に合せしが、二月興行には「東大釜」の切に海音の名作「八百屋」七歌祭文」を場の上せぬ。六月以後豊竹座に「いろは始千丈漣」「女長田皇櫻」等あれどいふに足らず。最注目す可きは世話物、心中物の此年俄に數を加へしこと

是なり。然りと雖も心中物、世話物は材を現社會の出來事に採るを以て、傀儡にかくるに奇想乏しく、段物に作るに變化少し。毎年數回の興行に悉く之を用ひ得んとを望む可からず。依然として數量の上に多きものは時代物なれども、唯此より後の此より前に異にして、心中物、世話物の新作なき年殆んどなくして稀に在るのみ。また此年に記す可きは義太夫淨瑠璃の祖たる竹本筑後が「曾根崎心中」に天下の賞賛を得、「重井筒」に世の好評を得て竹本座の基礎また動かじと思ふや、秋に至り病を得て場を退き佛門に入りしかば、武田出雲代りて座主となりぬることなり。

竹田出雲は阿波の人、武田近江が子なり。近江管て江戸に在りて砂時計を工夫し、京に上りて機振人形を製し、萬治元年十二月之を高貴に献じて竹田出雲と受領し、のち寛文二寅年大坂に下り始めて機振芝居を創め、竹田近江と改む。所謂竹田機振これなり。その次男を清定といひ、則二代の竹田出雲にて千日前に居るを以て千前軒と號す。是に於て筑後に代りて竹本座主と爲りしが、筑後場を退かば竹本座の聲名地に墜ちんを恐れ懇に請ひてまた樂場に入らしめ、寶永二年三月近松の『用明天皇職人鑑』を場の上し、表看板に「太夫竹本筑後、座元竹田出雲と銘し、近松を

場附の作者と定め、三絃には竹澤權右衛門、ちやま人形は辰松八郎兵衛を役し、傾城鐘入の段に出語、出遣をはじめ、人形、衣裳、道具立に善美を盡して、樂場の面目を一新せり。試に近松が時代淨瑠璃詞章の表本としてこの鐘入の一段を引かむ。

かれ入の段

涙川戀の水にとぢられて身を切くたく思ひより、うき川竹のうきふしを、せめて困もる月だにもあはれ枕にとひも来ず、我一人寝となりたるぞや、心づくしの年月は幾百夜をかなきあがし、しのぎあかすも此身一つの報の罪や、数々の岩漏る水のわきかへり、胸に漲る戀慕の熱湯、饑餓となつて戀につながら恨にからまれ、つゝむにあまりて、徳にいぞそめても、ひとり立たる一本すゝき、れたみの露の重たさよ、れたみもあだに打はらひ、懺悔に罪を減ぼさば、迷の雲も晴れぬべし、恨は流の眞砂にて照ると更に盡まじ、恐しの目元やとたぶさをとつてひきとむる、亂れし髪もみたる、我心も流の女のさんげの有様、これ御覽せよ、淺ましや、花の外には松ばかり、うきが友には酒ばかり、暮れそめて格于敲くらん、門に松立つ及より、桃に柳にあやめふく、軒の燈籠二度の月、菊の節供や年の暮、人の悦ぶ日といへば、我はなげきのますか、いみ、まるに祝ひし年もなし、恥をつゝめど花ふくる日、もはやたちて月のあし、只我のみおいくるか、と、苦なき空を恨にし、此の罪とがの懺悔の涙、積つて末に川と爲る、いくせく、のせこしにも、辛き果なき流の苦み、何時の世に誰か始めけむ、天竺佛の御國には、けんまい女宮となつて、唐の帝の色好、手いけの魚を

水深み妹背の國も傾きて、名を傾國と今の世も、人の心を和ぐる、和國にながれたち花の、花の情の契とかいて契情とは名つけたりや、山寺のや、春の夕を來て見れば、入相の鐘に花や散るらん、花やちるらん、情の花やちりぬらん、他し男のあだ花ならば、よそにちるとも心の匂は此身に残つて、うたるゝとも離れじ、委はこゝにつき鐘の、龍頭に立つたるたつかしらの、兩眼ひしぎの、麟の聲も思ふ中をばよもさげじ、二人連れゆく妹背の道には、東西南北八面玲瓏と明に、天に上らば非想非々想天までおつかけ、倍又大地の底に至るとも、一面八丈の淨玻璃の鏡に、影のたちそふ如くにつきまとはつてくるくく、くるく、くるはに、忽地獸の國、邪淫の角の高塀、長塀、大門變じて、鐵門の忍かへしは、劍の山戀墓の、餘らんく、蘭香の空、燒燭となつて、身は炭釜と焦熱の煙りがへしは、誰故ぞや、情は却つて仇と爲り、ともに重ねし比翼の翼や、意馬のてつちやう、猛火の羽風、おつたて、ひつたてゆかん來れとこそ、呼ぶも叫ぶも恨のこだま、のがれかた野の狩場、の吹雪に空、恐ろしや、空誓文の神罰、佛罰、皆身の上によりかたる、涙は血潮、雪霜は皆紅の雨、霞、おらあちくるしや、と嘆き呼ばる口には、氷の利劍を、含み、虚空をにらみ、大地をけたて、仇と情の二張の弓の、矢さきを折らんと怒をなし、面色變つて見えたりけり、きんせい東方しやうりうしやう、きんせい四方白龍、きんせい中央黃だい、黃龍、一大三千大千世界の、劫沙の龍王、哀憫納受、哀憫しきんの三きんなれば、何處に怨のある可きぞ、といのりいのらん、がつはどまるぶと見えけるが、二十ひるあまりの大蛇となつて、角をふりたて、鱗を鳴らし、夫をめぐりて、鐘にむかつて、つくいきは、猛火となつて、たちのほり、今より後

は夫婦妹背の守り神ぞといふ聲残つて、雲をまきたてまきおるし、隣壁して金色の花を降らして其姿虚空にまたがり入りける、尾の上の鐘のなりわたり、ひびきつたへて、これより世にはじまりし契情の大夫と名づけそめけるも尾の上の松のいはれかや、近松は嘗て都萬太夫座にて藤花變して大蛇となる奇巧を弄せし人なり、竹田出雲は機振芝居の出身なれば、この鐘入の段に如何に観客を悦ばしけむ。まして辰松八郎兵衛は古今の達人にして、手摺を離れ無量の手段を遣ふに全身少しも亂るゝことなかりきといへり。筑後出雲の交替によりて竹本座は毫も聲價を墜さず、否機巧の妙によりて傀儡に重を置く當時の観客を得る益多かりしならむ。出雲は後年作者と爲りて多く時代物を作り、また近松存生中もしかりに此種の淨瑠璃を出せしが、こは恐く傀儡を観る目睹親接の興會より打算せしならん。換言すれば詩樂の價值にあらずして舞臺面の變化を重しとせしによらむ。而も思ふる勿れ、近松が絶世の傑作たる諸心中世話物は最出雲時代に多く場に上り、その入形衣裳、舞台道具の精良は、ひとり時代物に幸せしのみならず、世話物をして層一層の完全を期せしむるに力ありしなり。

此年近松はまた『雪女五枚羽子板』『傾城反魂香』を作る。彼には丹前六方の歌を用ひて藤内太郎等五人兄弟のことをかさわけ、此は大津繪を材にして浮世又平が上を作れる、ともに時代物なれど、十一月『木曾軍記』の切に場に上りし作者未詳の『おなつ清十郎笠物狂』は世話淨瑠璃なり。世には『五枚羽子板』を『國姓爺』及び『曾我會稽山』と並稱して近松の三傑作といへど、其來由は詳ならず。翌る寶永四年に近松は『義經將基經』正月、『曾我扇八景』七月の外に、『兼好法師物見車』五月、『碁盤太平記』六月を作り、心中世話物に『心中二枚繪草紙』三月、『おさん茂兵衛大經師普曆』九月を新作す。こゝに注意す可きは『物見車』と『碁盤太平記』となり。前者は『太平記』の高師直、鹽谷高貞の確執を材料として鹽谷の没落を作り、後者はこの浮落敗死の鹽谷高貞を五年前の事變淺野長矩の死に附會して、兼好法師あともひと頭書し、付り師直が小夜衣、今は一樣の黒羽織、並に大勝四十七目の石と傍書し、『物見車』の八幡六郎、浪入しての名を大星由良之介といひ、同志四十余人と亡君鹽谷の爲に復讐するすぢを作れり。蓋し赤穂浪士の復讐事件は太平の世の噂喧しく、其角が所謂花やかなる説も多くして上なき忠臣と取沙汰此節その事ばかりなりければ、早くも元

祿十五年二月には堺町に會我の夜襲に附會せし歌舞伎を興行しぬ。されど當世の物議たれば置に三日にして止められしを、五年を経てこゝに近松の靈筆にて竹本座の淨瑠璃に上りしなり。後享保十八年に至り並木宗輔の『忠臣金短冊』(豊竹座)には吉良淺野を横山郡司信久、小栗判官兼氏に宛て、大石は大岸由良之助と名け、二年の後之を改作せし『鎧櫻故郷錦』(澤村訥子作)を中村座の歌舞伎に興行し、『忠臣』は軍記『津打治兵衛作』を市村座に興行し、歌舞伎淨瑠璃種々に仕組まれしが、出雲の『假名手本忠臣藏』出るに及びてまた動かす可からず。但俗高師直、鹽谷判官を知りて吉良淺野を説かざるに至る。而して師直といひ判官といひ、大星由良之助、嫡子力彌原郷右衛門、千崎彌五郎、竹森喜多八の類みな『基盤太平記』の假托命名に出でたり。乃『基盤太平記』を忠臣藏淨瑠璃の鼻祖と謂ふ可し。然れどもこは專史上の後果にして當時この作の如何ばかり歡迎せられしやは推測の外に證なく、また作として重んず可き價值ありとも見えぬ。寧ろ『二枚繪草紙』、『大經師昔曆』の心中物の悦ばれしやも知る可からず。『二枚繪草紙』の島市郎右衛門の心中は三年以前元祿十六年の夏より冬までの事變にて、『大

にお島市郎右衛門の情死の年月は詳ならず、皆々國氏の徳川時代の詩

經師昔曆』のまさん茂兵衛の刑死は二十一年前貞享二年五月の事變なり。『二枚繪草紙』の結尾に『弟善次は中詮なし甲斐なし、面目なし、せめては兄の報恩と恥も骸も衣裝に包み負ふて、先立のさける、扱こそ世上にこの男死んだ風説、死なぬ沙汰しやうじ二枚の繪双紙に戀路の回向を受けにける』とあれば、生死は確ならぬものから、なほ心中として噂高く、坊間の繪双紙などに浮名をうたはれたるにや。『大經師昔曆』はのちに『戀八卦柱曆』といふ。西鶴の『好色五人女』貞享三年版にも出て、『享主聞きとがめて人つかはし見るにまさん茂右衛門なれば、身内大勢催して捕へに遣はし、其科のがれず、栗田口の露草とはなりぬ、九月二十二日の曙のゆめさらしく、最期いやしからず世語りとはなりぬ、今も淺黄の小袖の面影見るやうに名は残りし』といへれば、此年西鶴が宇治加賀の爲に作り與へし淨瑠璃曆も此きわものを材と

材中には復讐心中の年月日附、無慮七十近くを擧げられしもお島の件は見當らず。よく調べ見るに『二枚繪草紙』の『血死期の道行』の文句中に『お島も同じ我座はお初徳兵衛のそのあかつきの夢も破れてまだ間もないに心中すぐせの報の業か』といへるあり。またおふさ徳兵衛の『重井筒』の道行中に『去歲お島の心中』とあり。お初徳兵衛の心中は元祿十六年四月二十三日、おふさ徳兵衛のは其翌寶永元年三月二十九日なれば、お島の心中は元祿十六年の五月以後ならんと思ふのみ。但しお初もお島も同じ天満屋の妓女なり。

せしなる可く、竹本義太夫が之と對抗せし『新曆』もまた然らずやと疑はる。果して然らば近松の『昔曆』はこの『新曆』に對して命ぜし題名ならむ。太夫は同じ竹本筑後なればなり。竹本座に『二枚繪草紙』の興行はじまりてのち半月、豊竹座も四月興行に『元服會我』の切に『彌市』高梅田心中』を場の上す。心中物の多きを見る可し。彌市も高の心中は何時とも知らず、作者もまた詳ならねど、當時豊竹座は去年十一月の『播州會根松』今年三月の『三井寺開帳』六月の『聖徳太子舍利都』の三者海音の作たる外に『傾城躑躅岡』の作者清水三郎兵衛あり、『男色加茂侍』の作者錦文流あれば、此心中物も『會我三部經』去年九月、『傾城千日鐘』今年七月等と幾多無名の作者の手に成りけむ。竹本座がむねと近松の新作によるに對し、豊竹座は獨海音にのみ待つ能はざりしとの、他の理由もある可けれど、作者として近松の敵なき一例とも見る可からん歟。

此年六月七日京下立賣堀河東へ入るところにて、不義の汚名をうけて夫に殺されし宮城傳右衛門の妻も種の二妹、姉の敵をうちし事あり。豊竹座の爲に『男色加茂侍』を作りし錦文流は之を淨瑠璃には作らて小説『熊谷女編笠』に作りて九月世に

公にしぬ。この秋豊竹座は四國中國筋へ旅興行にゆきしゆへか。然るに近松はこの材料を採りて妻敵討『堀川波の鼓』を作りて寶永四年二月竹本座の場の上しき。また堀河の敵討に先ちて五月十七日梅田にかめ與兵衛の心中ありて、かめは死し、與兵衛は助かりしを、近松の仕組みて『堀河波の鼓』の次興行に『かめ與兵衛緋縮緬卯月の紅葉』を出し、次に次で與兵衛の一人心中せしかば、また六月朔日を初日に『後日卯月の色上』を場の上ぼしたり。『卯月の色上』の中の巻に『ひろがりし浮名は何とすぼめても傘屋夫婦が心中と歌にうたはれ繪に賣られ、或は狂言淨瑠璃の三十五日にはやなりぬ』といへり。與兵衛が中心いかに心苦しかりけむ。

此頃に至りて近松の心中世話物はいたく世の嗜好に叶

ひ歓迎をうけて、新年を追ふて續出し、殆んど虚蔵なしともいふ可し。想ふに前に時代物を掲げ、切に新作世話物を出すとき、観客聴衆は時代物の奇異瑰麗なる眼

ほ、おかめ與兵衛の心中も明に年月日を記せしものを見當られど、一び助かりし與兵衛があとおひ心中、後日卯月の色上に、來月十七日はおかめ様のむかはりといひ、また、去年五月の十七日不慮の御難儀かけ云々といへば初の心中は寶永三年五月十七日なり。そを『卯月の紅葉』と題せしは四月興行なればならむ。但しあとおひ心中は此年寶永四年四月五月のうちに可し、日群ならず。

前の變化と、世話物の情緒至微なる心上の受感とを共に享け得可き利ありと雖も、必ずや世上の噴々たる好評は前者に軽くして後者に重かりしと疑を容れじ。それは前狂言は新作なきにあらずと雖も、概ね陳套なる源氏、曾我等を幾度か繰返して、殆んど客位に在るの觀あるを以て知る可し。例之ば吉例の如きことはあらんも、曾我の如き、寶永二年に『曾我三部經』、『豊』三年に『本領曾我』、『竹』、『元服曾我』、『豊』、『曾我扇』八景、『竹』四年に『増補富貴曾我』、『豊』、『根元曾我』、『竹』。何ぞ夫れ瀕々たるや。されば『根元曾我』切、卯月の色上』が興行二十日ばかりにて、『源氏十二段』切、丹波與作、關の小萬、待夜小室節』にかはりしは前狂言に於て何等の利害なしと斷ず可し。丹波與作、關の小萬の事蹟は詳ならねど、夙く元祿以前の小唄にも、『與作丹波の馬追なれど、今じや、江戸の刀さしじや、シャンとせ與作』など歌ひ、關の小萬の涙雨といふも古ければ、心中世話物の流行に應じて近松の靈筆に上りしならむ。外題に用ひし『小室節』は起原名義ともに詳ならねど、古き馬士唄の節なる可し。正徳二年二度目の興行には單に『丹波與作』と題し、享保十七年には『伊達染手綱』とかはり、更に下りて寶暦元年に吉田冠

へ。『人倫訓蒙國策』に馬士のことなして『當世』はたゞ辰巳あがりの聲して小室節なりといへり。

子、三好松洛の増補を経て『戀女房染分手綱』となりしは、この近松の『待夜小室節』なり。近松はまた寶永三年六月の事實に據りて、同五年四月、『おひめ久米之助、心中萬年草』を興行し、翌六年正月には『今川制詞條目』の切狂言に『おなつ清十郎、五十年忌歌念佛』を、同七年正月狂言には『おささ次郎兵衛掛鯛心中』と同じき六月には『心中刃は氷の朔日』、七月には『夕霧阿波鳴戸』、翌る正徳元年三月には彼有名なる『梅川忠兵衛冥途飛脚』を場に上げたり。また近松以外にては、此際心中世話物盛に、寶永五年三月豊竹座に作者未詳の『椀久未の松山』、同六年三月竹本座に作者未詳の『上巻助六千日寺心中』、四月、『おまん源五兵衛蘆分船』、八月豊竹座に『笠屋三勝二十五回忌』、同七年三月豊竹座に『心中戀の中道』、十月『椀久熊谷笠』、正徳元年四月には紀海音の『油屋お染袂の白紋』、同二年四月作者未詳の『今宮心中丸腰連理松』等あり。更に翻つて歌舞伎の方面を見んか。寶永三年大坂嵐座に『お七歌祭文』、次で『心中抱牡丹』、また岩井座には『鳥邊山心中』、その冬京都にて『助六心中』、同六年には大坂篠塚座にて『北野四人心中』、之を京都の夷谷座にて改題して『好色四人』

ち海音の『八百屋お七歌祭文』(豊)は寶永元の二月初興行。
り。『心中抱牡丹』はおかめ

枕』を興行し、翌七年の冬には大坂の嵐三十郎座にて『千瓢町心中』正徳元年の冬萩野座にて『大佛耳塚心中』同じき二年春には京の夷谷座、大坂の嵐三十郎座ともに『針金屋心中』を演じたりといふ。以上列擧せしところは記録に明瞭あるもののみ、若し漏れたるを補はばなほ數を増す可し。寶永、正徳の間心中の多きこといな心中物の行はれたると斯の如し。儒家一流の之に驚きて罪を狂言淨瑠璃に歸したるもまた宜なり。唯知らず、此の如きはよしや多少誘惑挑煽の恐ありともまた社會の傾向に出でしにあらざるやを。

上の心中物の一二につきて尙少しく蛇足を添へんか。『椀久未の松山』は貞享元年に歿せし椀屋久兵衛と妓松山との上を作りぬ。後二年豊竹座に興行せしものにまた『椀久熊谷笠』あり。享保八年竹本座に演ぜし文耕堂作の『椀久松山元日金年越』は椀久と瓢箪かしく、玉屋庄七が上を混合せし作にて、なほ明和七年に同座にて演ぜし『椀久松山由縁十徳』あり。みな同材異工、

興兵衛の心中なり。
ぬ。島邊山心中はお染半九郎の心中にて寛永三年九月の事件。
る。背々國氏の徳川時代の諺材。』

を。馬琴は椀久は延寶中に歿しぬといへり。何れか是なるを知らず。曲三味線の巻の三に右は此津に名を残せし椀久、昔の姿その儘にむじやくしや天窓に立竈の布子丸くけのひとへ帯、幸市

比較して見る可し。夏清十郎がとは西鶴の『五人女』に見ゆ。清十郎が刑死は寛文二年なりといへば『五人女』は事變後二十餘年になりし書とて、その頃は上方の狂言になし遠國村々里々まで二人が名を流しけるとあり。貞享以前狂言に仕組まれしと見ゆ。竹本座にても既に寶永二年に『夏清十郎笠物狂』作者不詳あるを、また近松の採りしは例の五十年忌をあてこみしならむ。後の淨瑠璃には安永七年に『夏浴衣清十郎染』あり。助六の心中も古く承應二年の事にて、早く延寶六年に山本土佐掾座の淨瑠璃、万屋助六心中』後に正徳三年江戸山村座に『花橋愛護櫻』の狂言あり。唯助六の事蹟は二三混淆して甚明ならず。『千日寺心中』は承應二年のそれと異なるが如し。心中は元祿八年にしてその十五回忌に相當せるを以て場に上したるのみ。龜屋忠兵衛の捕はれしは寶永七年十二月なれど、同年九月の板御入部伽羅女』の中に、谷町を南へ天

若のあきから、懐に伊勢天目、吸口なしの煙管とるめん、香足袋、細緒の奈其草履、かはらぬものは扇車の紋所、今とては智恵のなきそなた顔して座せりといへり。風俗見るが如し。

わ。寛文二より寶永六までは四十八年なり。若し正しく五十年忌ならば萬治三年のことならざる可からず。たい大數によりしか、疑を存す。

笠屋三勝、茜屋半七のか。天満屋お初がことも亦此書に見ゆ。曰く『折しも虚空に中やさしき聲音にて、さん候、われは此世を去りし心中女

王寺より堺へぬけんとも何も此通へ出れば兩側に人たち連り、心まかせにありきもならず、各不思議この群集は何事にてと髪結らしい男に問へば、されば此廣い大坂にも珍らしい今年の春より梅川といふ新町の女中籠入りしてより久しい事じやが云々とあれば同春以來の事件と見ゆ。

に候ぞかし、通しころ干日寺にておとさきのおはれみゆへ云々(中略)といふは天満屋初が聲とあり。お初徳兵衛の下に注し忘れたれば此に追記す。

大坂にて『冥途飛脚』の場に上る前約五旬、早く冥途の旅に立ちしは京の宇治加賀掾なり。之が對手たりし竹本筑後も壽已に華齡に達して技漸く老ゆ。はじめ筑後の門下に中紅屋長四郎といふものありしが、筑後はその音聲低きを以て場に上るを許さず。長四郎之を含み、出て、豊竹若太夫に京都に從ひ、のち大坂にかへり、北新地會根崎の豊竹座に入りて若竹政太夫と號しぬ。あるとき筑後その淨瑠璃を聞きて太く感じ、わが一派を傳へんもの此外にあらずとし、正徳二年よびかへして『丹波與作』の道中双六の段を語らしめ、竹本を名乗らしむ。越えて正徳四年の秋、筑後は近松の新作時代物『瀧口横笛娥歌留多』を最後の語りものとして、九月十日六十四歳を一期として冥界の人となりぬ。紛々たる西派淨瑠璃に義太夫の統一を

成し、貞享以降三十年、語るところ一百六十餘番。四天王寺念佛堂の梵鐘は長へに此樂界の偉人を弔せり。三十年來進退を共にし、譏譽を分ちしわが元祿の文豪は其畫像に賛して曰へらく、『堪能の人のいひしは、節に節あり、節に節なし、言葉に節あり、言葉に節なし、語るに語りて、節に語るなど、此六句のものは得易き様にして得難きのみ、よく得たる人は誰ぞや、前筑後掾藤原博致。一ふしを語りぬとしてうつしえに今も聲ある竹の面影』と。

よ。『音曲智度論』にありと云ふ。

回顧すれば十年前、筑後が場を退かんとせしとき、樂場の衰微を憂ひて懇請抑留せしは新座主竹田出雲なりき。然るに今や筑後は竹本座を去りしに非ず、現世をあとになしぬ。出雲此に至り何の策かある。これ獨竹本座の愛に非ずして淨瑠璃界の大事、浪華滿城の問題たらずんばあらず。之より先正徳の始、心中物全盛の反動として稍時代物の場に上る多さを見る。試に之を數ふれば、寶永五年には紀海音の『山樹太夫戀慕湊』外二種なりし時代物の、同六年には、同じ人の『富士親王嵯峨錦』近松の『紅葉狩劔本地』及び、赤染衛門榮花物語』外二種となり、同七年には近松の『會我虎が右磨』大原問答青葉笛』百合若大臣野守鏡』海音の『頼光新跡目論』外一種

となりしもなほ毎年心中物殆んど之と半せんとす。正徳元年には近松の『新しいるは物語』『本朝五翠殿』『吉野都女補』外一二に對して心中ものは二種にすぎず。同二年に至りては兩座十二種の題目中心中世話物は一二にすぎず。更に翌三年には文耕堂松田和吉が初作『河内國姥が火』海音の『八幡太郎東初梅』竹本彦太夫が初めて場に上りし近松の『天神記』以下約十種、同四年には筑後が最後の語物『娥歌加留多』以下兩座合して六題目、ともに心中なく、翌五年に至りて僅に一の『生玉心中』あるのみ。豈反動にあらざるなけんや。出雲は能く機を視るの人なり。こゝに深く感るところありて、近松と謀り、正徳五年十一月朔日表看板に掲出せし新浄瑠璃は何ぞ。少くとも當世には近松唯一の傑作と驚きし『父は唐土、母は日本、國性爺合戦』是なり。『操年代記』當時の状を傳へて曰く、『浄瑠璃の思ひつき、門左衛門老功の一作、力瘤を出し、文句のはだへ麗く、書き廻はしたる筆勢面白く、浄瑠璃は竹本政太夫、竹本頼母、豊竹萬太夫、右三人にてあしかけ三年もちこたへ、見物唐子鬻の道行口眞似せぬ人なし、筑後掾存命の頃、浄瑠璃しかく、なかりしが、諸人歌舞伎芝居より面白しともて嘸し、次第に繁昌すると、第一作者の趣興、人形の衣裳道具まで華やかに拵へ、

手を盡くし美をつくせば、歌舞伎は外になりて、浄瑠璃の評判はしつゝすみくまて耳かしましくおもひつゝと。實にや唐土の人物風光、衣裳道具の美、目を驚かしたる可く、九仙山の犬仕掛大道具は出雲が得意とするところ、ましてや邦人の武を海外に輝すと見物如何ぞ快からざらむ。膽張り氣昂るそのところのみ。之を行るに近松が妙文あり。十七月の大入空前絶後は當然の結果のみ。敢てそが文學上の價値を云々せずして第一の傑作と推せしもの、まことに無理ならぬとなり。『國性爺御前軍談』の序には、『其こくせんやは何の事ぞ、はて國せんやといふ菓子のことにてはなきやといへばさていかいたはけものかな、そのごとく菓子に仕出し、または子供の遊び着類の模様などするほどもてはやす物語』とあるにて流行の甚しかりしを推知す可く、享保五年の『心中天網島』にも南まいた坊主のてんがう念佛に『契槍流は珍しからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて』と語り、『國性爺の道行念佛が所望じや』といひ、『やれ珍らしい小春様』はるくして小春様と主の花車が勇む聲、これ門へ聞へる、高い聲して小春くといふて下んすな、表にいやな李頼天が居るわいの』といふ、みな此浄瑠璃狭斜市井の語草たりしを證するに足

る。たゞにこれのみならず『南水漫遊』によれば第三樓門の場は長崎通辭周文三右衛門の漢譯して清國におくりしといふ。近きころアストンの『日本文學史』にこの梗概をかきしもまた所謂第一の傑作といふ世評の間接に及ぼししところならむ。實にやその道行に、

唐子齋には薩摩柳、島田齋には唐柳と、大和唐土うちませて、さしもならはぬ旅立や、船と陸とを行く道は、笠すてられず、ふところに枕をたしむ夢たしむ千里を胸にたしむこむ、女心の強弓も男ゆゑにぞひかれゆく、我は故郷を出る旅、君は故郷へ戻る旅、二葉に見せて、梅檀女、小睦が諫め力にて大明國へと思立つ心のうちこそはるかなれ、親と妻とを持し身は何か、離きは有明の月さへ同じ月なれど、なふ二人みなれし、圍の中、名残しは、大村の浦の漁風一村雨はさらさら、とほれてもはれぬ我涙袖に包みて、袂に拭ふ親の宮に影とめて、泣ぬと人やみるめの浦……

世を擧げて誦記せしも宜こそ、巢林子が名文なりける。竹本座が能く筑後歿去の爲に蒙らんとせし大打撃を免れ得しは實に出雲が此一舉措に在りきと謂つ可し。此時近松は六十二、出雲は年歴に二十五才なりき。因にしるす、此淨瑠璃出でし正徳五年は清の康熙五十四年にして、主人公たる延平郡王鄭成功の薨後五十四年に

當れりき。

『國姓爺』の好評嘖々此の若きありしかば、所謂三年越十七月の後、享保二年の春近松は引つゞきて『種は日本産は唐土、國姓爺後日合戦』を出し、人形遣の名手吉田文三郎出座せしも、前の大入に引きかへ甚不繁昌に終り、同七年に至り更に『唐土船今國性爺』を作りしも、また當らず。所謂貂足らずして狗尾つぐの類か。飽きやすき人心ならずとも十七月の興行の後には、斯る反動は否み難けむ。こゝに訝しきは海音の『傾城國性爺』なり。『外題年鑑』『聲曲類纂』ともに正徳三年の條に掲げたれば、近松の『國性爺』より先出かと思へば、近松の作に據りしなりといふ。恐く後説の如くならんも、若し前説の如くならば、『國性爺』唱提の名譽は半海音に歸せんか。疑を存して大方に糺す所以なり。

竹本座の勢斯の如く盛なるを以て、海音も亦豊竹座の爲に連りに新作に力めしが如し。正徳の初年近松の『冥途飛脚』の梅川忠兵衛に對ては、『袂の白綾』のお染久松を作り、夫より同二年に『平安城細石』三年に『八幡太郎東初梅』、『傾城三度笠』、『鬼鹿毛武藏鑑』四年に『御前會我姿富士』五年には『傾城思升屋』と年として新作なきはな

く、享保元年より翌二年の春にかけて近松の『國姓爺』が天下の耳目を聳動するや、海音は連りに『鎌倉尼將軍』『花山院都巽』『甲陽軍鑑時世粧』を作り、同じき三年、豊竹若太夫の受領して上野掾重勝と號するや、『鎌倉三代記』を作りて語らしめ、翌年、義經新高館』を出す。海音の外に豊竹座の爲に作りし者に戸川不麟、錦文流の徒ありてまた竹本座と對立せんとに盡力せり。その取材の上にて於ても、嘗て心中物を以て相當りしが如く、今や對外宣武の虛榮心を勵かす『國姓爺』に對するもの、豊竹座に海音の『神功皇后三韓責』『鎮西八郎唐土船』あり。殊に後者の如きは享保五年正月竹本座が二回『國姓爺』を演ずると同時に場に上したるを見る。海音の『吳越軍談比翼臺』(享保六)、『玄宗皇帝蓬萊鶴』(同八)、『竹田出雲の三國志大聖諸葛孔明鼎軍談』(同九)の如き外國物は皆傀儡の觀者に奇幻瑰麗の快を買はしめんとに出て、ともに『國姓爺』の好評が生み出し、結果ならざる可からず。世の嗜好風尚の更に一轉せるを證す可し。

然れども心中世話物また之と並び行れぬ。『國姓爺後日合戰』の失敗の後、近松は『繪籠三重帷子』を作り、享保三年に『山崎與次兵衛壽の門松』『博多小女郎浪枕』の二種、

同五年には近松六十八歳にして『心中天網島』同六年には『女殺油地獄』を出し、が、翌享保七年には七十歳の近松と六十歳なる海音とは心中物を以て竹豊二座の爲に競争せり。此年四月五日宵庚申の夜、千代半兵衛の情死ありしかば、海音は得た法かしてしと、翌六日直に『心中二腹帯』と外題を掲げて八日より興行を始めしに、二十日に至り竹本座亦近松の『心中宵庚申』を出しぬ。奇警なる出雲、靈腕神遊の近松も此に至りて聊か輸籌の感なき能はず。近松の傳記は初にひししが如く、著作以外に甚詳ならず。従つて推測を加ふるの已むを得ざるあり。『心中宵庚申』の後二年七月の間其作に署名せしものは唯厘に享保九年の正月興行『關八州紫馬』の一あるのみ。『大塔宮職鐘』は出雲、文耕堂の作にて近松の添削とあり。『右木將鎌倉實記』(享保九年十一月)は世に近松の絶筆と稱すれども、また出雲の作なり。『宵庚申』と『二腹帯』との甲乙は暫く措きて、この出後れし心中物が近松世話淨瑠璃の最後たるを見れば、『油地獄』の後は寧ろ強弩の末の感あり。或は恐る近松は老ひたるのみならず、身心漸く衰へしにあらざるか。見よ、正徳三年に二回『河内國姥が火』を作ると以來十年間其名世に知られざりし文耕堂松田和吉は『宵庚申』の次に『佛御前扇車』を出

し翌享保八年竹田出雲は三十三歳にして始めて『大塔宮職録』を場に上ほし、その冬は『吉吉空月、櫻町名花香』といふ心中物をさへ作りたるに却りて近松は「作をたすなはず、僅に『繁馬』を出して時代物の最後を結びしのみ。享保九年七月の出雲が作『鼎軍談』は近松見て可ならずと爲し、出雲の爲に細に作曲の秘を傳へしとかや。斯くて十一月二十二日近松門左衛門信盛は七十二歳を一期として、淨世の戀は三場の傀儡、殘る櫻の花に匂をとめて神祇釋教空しくも無常の風に送り三重法妙寺裡の苔に埋もれぬ。

『代々甲冑の家に生れながら、武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺奉りて寸爵なく、市井に漂ひて商賈知らず、隠に似て隠にあらず、賢に似て賢ならず、もの心りに似て何も知らず、世のまかひもの、唐の天和のをしへある道々、技能雜藝滑稽の類まで知らぬまなけに口たまかせ筆にはしらせ、一生を轉りあらし、今はの際はいふべし思ふべき眞の一大事は「一字半言もなき倒懸」を、ろに心の耻をおほひて七十餘歳の光陰、おもへばちほつかなき我世經畢、もし辭世はととふ人あらば、淨世二重の鏡、或はそれや辭世、法ほどに扱も、その後にはこの櫻の花しにほは、

享保九年中冬上旬、入寂名阿梅院穆矣、且具足居士不俟終焉、期豫自記、春秋七十二歳のこれとは思ふも、あろかうつみ火のけぬまあたなるくち木かさして、以て近松の自傳に宛つ可し。その一周忌に貞柳の狂歌あり。曰く「さつするに介は安樂國、姓爺さても其後びんきなければ」。巢林子、平安堂、不移山人等は、門左衛門が別號なり。

巢林子の世を辭するとともに、紀海音が筆を淨瑠璃の作に絶ちたるはまた逸目す可からざる事實なり。かの『心中二腹帯』の後、『東山殿室町合戦』、『玄宗皇帝蓬萊鶴』を作り、近松逝去の前年七月、『傾城無間鐘』を出してより、海音の名また豊竹座作者として現はれず。享保七年より寛保二年十月その死去に至る三十年間にたゞ一回『八百屋も七戀耕櫻』あれども、こは寶永元年に同じ人の作りし『八百屋も七歌祭文』と同物なれば、海音は近松とともに淨瑠璃界を退治しと謂ひ得可し。出雲、文耕堂が近松の後を承けしが如く、海音に代りしものは西澤一風、田中千柳の輩なり。且此傳承と同時に、出雲、文耕堂は『磯鏡』に合作の名を掲げ、一風、千柳は『建仁寺供養』に並びて名を署し、爾後多くの段淨瑠璃は二名以上數名の合作に成るの端を發し、また混

沌一體の美なきに至る。傀儡はなほながく世にめてられ、淨瑠璃は久しく人に悦ばれしも、享保十年以後の義太夫淨瑠璃は第二期の盛に入りて、遂に初期旺盛の氣魄なし。

海音退くの前九月都一中は京都に歿し、近松歿する翌年七月十寸見河東は東都に逝きぬ。かれは西派京都の淨瑠璃を代表する名家、これは東派江戸淨瑠璃を大成せし巨擘、皆前後凋落す。幕は享保十年を以て一ひ下さざる可からず。予は此を此に断つ所以なり。

終に臨んで一言讀者に告ぐ。はじめ予の此稿を起すや、前二年を以て前期を了し、後一年を以て後期を完うせんと計量せり。然るに予の疎惰に加ふるに塵事之多端と身体之異常とは、慶期をあやまら筆を措かしめ、是に至るに筆を此に断つ之の已むを得ざるに終れり。また予はまづ主として文運變遷の事實を講述し、爾る後徐に内容の批判に及び兼ねて世道人心と文學との關係に論及し、聊近世文化史の一面を闡明せんを希望したる也。然るに事志

と齟齬して此に及ぶ。唯乾燥なる串録ありて殆んど批判なき文字と爲れりしは深く予が自慚ぢて罪を讀者に謝する所以なり。然れども時代的に稍詳密の筆を此方面に着け得しは陳吳たる予が榮譽なり。諸君請ふ項霸王たれ、また漢高たれ。敢て蕪謝を講後に加ふ。

明治三十又六、九月上旬

蠶

舟

生

近世俗文學史終

近世俗文學史

第二前期の二

第二章の三

門左、海音時代の竹野淨瑠璃

10

910.25

Sa445B

084863-000-0

910.25-Sa445K

近世俗文学史

坂本 健一 / 述

M30序

DBB-0017

